心から心への言葉

ウオッチマン・ニー

序文

『あなたの大滝のとどろきに、淵が淵を呼び起こしました（詩篇 42:7 前半）。』心の淵よりも深いものは何でしょう？もっとも賢い男、ソロモンはこんなふうに忠告しています、『力の限り、見張って、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれからわく（箴言 4:23）。』神の声を聞いた心は、別の心にも、同じ声を聞き、それに応えるようにと呼びかけます。これこそ、ウォッチマン・ニー兄弟が、心から分かち合いたいと望んだものです。

主に仕えている間、ニー兄弟は、神が語った言葉を伝える中でも、心から出たものだけが、他の人の心にも届くことに気付きました。知識は必要ないというわけではなく、それは上からの啓示、導きから来たものでなければならないのです。そのような知識だけが、生きており、人の心の奥底まで達する力があるからです。ニー兄弟は多くの心へと、言葉を書き送り、また、語りかけて、神の栄光へと向かわせました。

本書は、ニー兄弟が、主に仕えた生涯のいろいろな時期、多くの人に向かって、心から心へと語った話を集めたものです。いろいろな話題にふれていますが、そのどれもがキリスト者の生活に深く関わっています。どの話題も、霊的でありながら、現実的な性質を持つものです。多くの中から選ばれ、翻訳され、まとめられた 52 の文章がこの祈りの本、『心から心への言葉（Heart-to-Heart Talks）』として出版されました。それぞれの引用元は、本の適当な場所に注意書きとして挿入されています。私たちの祝福された主が、これらの言葉を用い、私たちの心をご自身の元へと導いてくださいますように。

1.へりくだり

載せている荷物が重いほど、舟は水の中へ深く沈みます。たくさんの実をつけるほど、枝は垂れ下がります。樹が大きいほど、根は深く張っています。これは、神から多くの恵みを受けた人たちも同じなのです。少ししか恵みを経験していない人ほど、自分が受けた恵みを鼻にかけます。しかし、へりくだっているのは神の恵みで満ちている人たちです。神のみが人をへりくだったものへと変えられるからです。へりくだりとは、自分のことを、できるだけ思わないようにすることではありません。自分への思いとは関係がないのです。へりくだっているとは、自分を低く見ることではありません。自分をどう見るかということとは、まったく違うのです。真にへりくだった人とは、自分に死んだ人のことです。自分に死んでいない人も、外から見れば同じように行動してるかもしれませんが、内側では、いつも自分を誇っています。まさしく、『人の心は何よりも陰険（エレミヤ 17:9）』なのです。

へりくだりとは、人前に出ることを避けて身を引いたり、何かを恐れることとは、まったく、別のものです。このふたつは明らかに意味が違います。自分の力で、また、生来の気性のままに（へりくだった性格の人もいるからと言って）、へりくだろうとしても、そのような人たちはいずれは、引きこもったり、あきらめてしまうことになります。しかし、主にあって本当にへりくだっている人は、責任から逃げようとせず、正面から向かい合います。神と生きる中で、勇気をもって前へと進みますが、その中でも常に、自分が汚れており、無力な者であることを認めています。それでいて、主に信頼すること、主にすべてをゆだねることをやめません。責任を避ける人は、へりくだっていません。むしろ、そうすることで、その人の霊的なあり方に問題を抱えていることが現れてしまいます。

へりくだって主に仕えながら、責任を真摯に負う人はなんと少ないことでしょう。『私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです（ピリピ 4:13）。』そして、『このことばは、真実であり、そのまま受け入れるに値することばです（1 テモテ 4:9)。』私たちが、主を見上げていますように。

2.従順

神に従うのは、何と甘美なことでしょう。神に従うために、多くのものを失っても、私たちの心は喜びであふれます。神に従う道を歩いたことのない者は、この喜びを知らないし、理解することもできません。しかし、日々、この従順の道を歩む者は誰でも、損を益と思い、恥辱も誉れとみなすようになります。主に従順であれば、報償を得られます。その報奨とは、誠実に仕えるものは、次第に、自分を否定して、主に従うための、より大きな力を見出して

ゆくことです。主に逆らうものには、自分の意志に従うことに重きを置き、しだいに、反逆を強めてゆきます。これが実際に私たちの人生で起こります。主に従うほど、主はご自身を褒賞として与えてくださいます。私たちが従うとき、よろこびは苦難を通して増し加わります。本当に主を知っている信者も、従順に仕えることを通じて、さらによく知るようになります。

従順さには程度の差があります。絶対的に従うことは何と難しいことでしょう。しかし、それでも実に甘美なものです。すべての面で主に従うには、完全に自分に死ぬことが求められます。神の御心は、自分に死ぬことで達成されるからです。これ以上に、主に対する感謝を現す手段はありません。それでもなお、人の心には偽りがあり、信じる者の心も完全に捧げられていません。私たちは、自分がどこまでも従順であり、優しくへりくだって、主を愛していると思いこんでいますが、多くの場合には、不従順で、尻込みばかりする者であることに気付いていません。日々の生活の隅々で、自分には従順さが欠けていることを深く心に刻み、より多くの恵みを受けることができますように。

人の心とはなんと偽りに満ちているものでしょう！心は、自分がおおむね従順であったと言って満足します。しかし、従順でなかったことについては、こう考えます、『そんなに細かいところまで全て従えなくても、仕方がない』、とか、『だからと言って落ち込むこともないさ』、とか、『あれだけやれば十分ではないかな？』といった具合で、このような言葉を、逃げ口上として使います。主がその人たちを導き、こんな言葉の後ろには、不従順な心が潜んでいることに気付かせてくれますように。人は、何かに従ったあとはいつも、神が求める従順さを完璧に満たしたように思い込みますが、従わなかった物事に対しては、あれはどちらでもよかったとか、必要なかったとさえ、考えようとします。これは、不思議なことではありませんか？本当に主の心を知っていれば、そのような考え方は出てこないはずです。はじめに損得の勘定をしないで、十字架を負うのは何と難しいことでしょう。

3.正しいキリスト者

救われる前、人は罪とそむきの中に死んでいます。その人は義について何も知りません。救われた後は、少しずつ、神の清さと正しさを理解し始めます。しかし、ここに若い信者が持つ危険があります。新生の後で得た知識から生じる危険さです。この危険の性質はどのようなもので、どこに現われるのでしょう？若いキリスト者は、その態度や言動において過度に正しくなろうとするあまり、人にも多くを求めてしまうことがあります。新しく得た光の故に、善と悪の違いに敏感になりすぎ、新しい自分の良識と相反する他の者たちを裁いてしまうのです。この時期には正常なキリスト者に対して、大きな怒りを抱くことすらあります。人の中に何か、受け入れがたいものを見出すと、こんなふうに言って、すぐ相手を非難します、『なぜ、この人は、こんなことをしたり、あんなふうにするのだろう？こんなふうに振る舞うのはなぜだろう？』これは、若い信者がとくに、よくすることです。

『正しさを拠り所とする』信者とは、一般に、神の恵みをあまり多く受けていない人たちです。彼らが、主の道に深く分け入り、霊的ないのちが豊かに築かれたら、他の人にももっと、恵み深くなるはずです。いわゆる山上の垂訓の中で、主がこう語られたと記録されています、私たち信じる者は、他の者に義であることを求めるべきではないと。主は、私たちが、自分を打つもの、迫害するもの、だまし取るものに対してすら、義を求めることを望んでおられません。主は、私たちがそれに堪え、優しさで報いるようにと命じ、教えています。天なる父が完全であるように、私たちも完全でなくてはなりません。主は、義でないものにも、義なるものと等しく雨を降らせてくださいます。主人の教えに従っていないと、世からそしられることのないように気を付けましょう。

キリスト者は、自分は正しく、しかし、他者にはいつくしみ深くあるべきです。自分の権利を要求したり、正当に扱われることを求めてはいけません。これがキリスト者の寛容です。キリスト者は、自分は正しくあっても、人には正しくあることを求めません。このように歩むことで、主とともに世を治めるものとなれます。

4.キリストのいのちの現われ

人の一生がどのようなものだったか、いくつかの節目となる出来事だけで説明することはできません。それは、むしろ、全生涯を通して日々、行ってきた事柄に現れます。人がどれだけ霊的であるかは、説教がどれだけ的確であるか、教会で来訪者と仲良くやっていけるか、とか、表向きの生活がうまくいっているかといったことで、測ることはできません。それは、生活の内面から推し量るべきものです。すなわち、その人の喜びや悲しみ、言葉や行い、そして、他の人とどう接するかといったことです。

キリスト者の歩みの初期の段階には、多くの『作り物の』愛、信仰、忍耐などが現れるものです。自身の努力から来るこう言ったものは、外に向けた霊性であって、心の中の神の働きから生まれたものではありません。自我を覆って、人目から隠すことはできても、本物の自我は、自分でも気づかないうちに、すべて現われてしまいます。このようなとき、この人の心には純粋に罪を憎む気持ちが欠けているのです。なぜ、こうなるのでしょう？この人の心の動きを見てみましょう。例えば、ちょっとした欠点が人に知られると、大きく気持ちが沈み、悲しみに包まれます。一方で、誰もそれに気づかなければ、神の前に、それを嘆くこともしません。

そのような状態で生きていることに気付いた時、信者が

そこから抜け出す最善の道は、自分の『顔』へのこだわりを捨てることです。その人がすべきは、神の前に、自分の自我がいかに憎しみに満ち、よこしまなものであるかを告白すること、聖霊を通して、完成された偉大な十字架の御業を自分のものとし、自我を死に渡すこと、そうして、自分の中にキリストのいのちが自由に生きられるようにすることです。日々、聖霊と共に働き、『(自分の)道を主にゆだね、主に信頼すれば、主が成し遂げてくださる(詩篇 37:5)』ことを学ぶべきです。自分ではキリストの中に生きているつもりなのに、生活のすみずみにまで主が現れていなかったら、神の御前に行って、自分の本当の霊的な状態がどんなものか示してくださいと、お願いするべきです。

5.満足

満ち足りることはキリスト者の美徳です。すべてのものを神の前に差し出すことが、心からの満足への第一歩です。自分にとって神がすべてであると考える人は、満ち足りた心を持っています。世を友とする信者は、この世の名声を求めずにいられません。しかし、この世の名声、この世の栄光は人の心を満たすことはできません。どれだけの名声を得ようと、一日たりとも満足していることはないでしょう。キリストを自分のすべてと思っているものこそ幸いです！キリストともに天の下へと昇り、日の下で行なわれたすべてのわざのむなしさを見るまで(伝道者の書 1:12-14 参照)、私たちは地上のものを求めてやみません。聖霊の導きを受け、キリストにあって受けたものだけが永遠の真実であることを悟ることがなければ、私たちも世にあるものを追求し続けます。神に感謝しましょう。キリストを信じる私たちにとって、主が何よりも尊いものとなっていることを。

6.隠される

神の聖人たちよ、この世の名声を求めることはやめ、むしろ、神の中に自分が埋もれることを良しとしましょう。名声と栄誉を追い求める時、人は悪魔に傷つけられているのです。主の御手の中に自分を隠す人たちは、守られており、心も穏やかです。神の聖人にとって、世の栄光を追い求めるのはあってはならないことです。主を本当に愛する人は、この世で認められたいなどと望まないはずです。それなのに、信者の中には、高いところに置かれることを望み、また、キリスト者の集団や神の人たちの集まりにおいて、自分を『先生』と呼ばせている人たちが多く見られます。ここで、信者の問題は、世ではなく、教会にあります。私たちの主は実に賢いお方です！主は初めから、私たちがお互いを兄弟と呼び合い、他の言葉を使わないように言われたのです(マタイ 23:8 参照)。ああ、指導的な立場にある兄弟たちの中にさえ、尊敬の念を込めて呼ばれたいと望む人が多くいます。聖霊の働きを通して、十字架の精神を受け入れない限り、名声を得たいと言うよこしまな思いから逃れることはできません。

多くの人たちが、世とは、この世界の中にだけあるものと思い込んでいて、世は教会の中、そして、信者の心の中にまで存在することに気づいていません。このようなよこしまな心は、信者が本当の意味で世に死ぬまで、消え去ることはありません。聖人の中でも、十字架で主と共に死ぬことによって、本当に主とひとつになったものだけが、教会と心の中にある世に対して死ぬことができます。この世の名声を求めないことは心の問題です。もし、主ご自身が私たちを人目を引く場所に置かれるなら、そこから身を引くことはありません。残念なことに、人は名声を得ると、その後、さらなる称賛を欲するようになるものです。心の奥底では名声を望んでいるのです。しかし、主のもとに安らぐことを願っているなら、神の喜びのみを求め、人の意見には耳を傾けないでください。そうすれば、どこであれ、神が私たちのために定めた場所にとどまり、そこで安らぎを見出します。私たちが安らぎのある場所に至ることを、主は望んでおられます。神のうちに隠されるとは、何かから引き下がることではありません。それは名声を得ることを意図しておこなうことでもなく、何かから逃避することでもありません。ただ、神の胸のうちに休息することです。

7.方策

この商業主義の時代にあって、今は、あらゆる物事が人の企てによって動きます。悲しむべきことに、その影響は信じる者の間にも及んでいます。『想い』と『企て』は、違うものであることを知っておく必要があります。誠実に人を愛することと、何か目的があって愛することの間には、大きな隔たりがあります。人を本当に愛する者は、心から愛するのですが、何かのもくろみからそうする人は、愛するように自分を仕向けています。心から相手を愛する人は、真に心の底から愛が生まれるのに対し、愛するふりをしている人は、無理してそう見せ掛けなくてはいけません。

心からの愛はきわめて自然なものです。内に向けた想いと、外に向けた想いが一致しているからです。これに対し、計略としての愛は、意図的に作り出されたもので、内側と外側で食い違っています。世にあるキリスト者は、自分の心のうちの企みに大きく支配されており、それがゆえに、不自然な行動をとります。そこでは、うちなる真実が外に湧き出ることはなく、むしろその行動は、批判されることの恐れや、賞賛を求める気持ちから生まれるものです。

たとえとして、兄弟の愛を考えてみてください。主キリストにある兄弟への愛を口にしても、そこに本当に愛の心はなく、霊的ではないと批判されることを恐れてそうしてい

る人もいるでしょう。ああ、愛と呼ばれるものの多くは偽物です。本物の愛ではないのです。私たちから、そんな見せ掛けの愛が現れることのないよう、主よ、助けてください。

使徒パウロが第 1 コリント 13 章で言ったことは、本当に、私たちの気持ちと思いの奥深く入り込み、心を揺さぶります。自分の体を火の中に捧げるような、偉大な行いをしながらも、そこに愛がないこともあるのです。その行いは誠実な心から生まれるものでなく、何かの目論見があって出てくるものです。使徒パウロは、そんな行いは『何の役にも立たない（3 節）』と言い切っています。企ての中から現される愛は、外面的な愛であり、そこでは、心と言葉が一致していません。外に向けて取り繕ったものであって、そこには内なる神の恵みの働きがありません。このような愛は、他の人だけでなく、自分をも欺くものです。その愛は目的があって生まれるものであって、そこには敵のたくらみがあります。この愛は長く続くことはなく、いずれ、本当の心の状態が現れます。このような作りものの愛、まやかしの愛は人の霊的な生活にとって、何の助けにもなりません。

主の十字架に、心の中の全ての毒を消し去っていただきましょう。使徒ペテロが、第 1 ペテロ 1:22 と 4:8 に書いたような者になりましょう、『あなたがたは、真理に従うことによって、たましいを清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、互いに心から熱く愛し合いなさい。何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。』

使徒ヨハネのこの言葉もいつも心に留めておきましょう、『子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと真実をもって愛そうではありませんか（第 1 ヨハネ 3:18）。』

8.知識と裁き

裁くことは聖書の中で禁じられています（マタイ 7:1 を参照）。神の聖者は人を裁いてはならないはずなのに、今日のキリスト者は、キリストにある兄弟に対して裁判官として振舞うことがあります。キリスト者はこの世でもっとも批判的な人たちだと言われるのを、私は何度も聞いています。これは、今の時代のキリスト者が陥りがちな過ちのようです。私たちが語る言葉の見張り役として、主が定めた人たちを敬ってください。裁くことは知識と密接につながっています。物事に明るくない人ほど、裁いてばかりいます。人の言うことだけを聞いて、事実を確かめもしないうちに、相手を裁くのは、実に考えが足りません。誰もが、人に分からない秘密を持っているのですから、それをかえりみずに拙速に相手を裁くのは不公平なことです。他の誰についても、完全に知っていることなどあり得ないのですから、あえて裁かないようにするべきです。ある人や状況について、すべてを把握していると思い込んでいても、そこにはやはり、自分で気づいていない誤解があるかもしれません。私たち自身も、どれだけ誤解を受け、誤った批判をされてきたか、それが、どれほど辛く苦しいものだったか、思い出してみてください。その時、私たちを裁いた人たちは、すべての事実を知り尽くしていると信じ込んでいたのです。私たちが人を裁いた時も、同じように思っていたのではないでしょうか。自分が裁かれたときは心をかき乱されたのですから、なぜ、他の人には、善意を持って判断してあげないのでしょう？

残念ですが、聖書知識を学んだがために、それが、他の人を裁く原因となることがよくあるのです。事実、頭の知識が増えるほど、私たちの裁きも厳しいものとなります。そうなると、知識ばかりを積み重ねる意味など、どこにあるでしょう？悲しいことに、本から学んだもの、頭に詰め込んだ知識が、人を裁く根拠となってしまい、このため、聖書の教えが明確であればあるほど、私たちが下す裁きも厳しいものとなることがよくあります。しかし、神は私たちを裁判官として任命したわけではないのです。そしてまた、人を裁くものは、キリストの裁きの座で自分が裁かれると、いつも心に留めておくべきです。人を非難することばかりを好んで、悔い改めようとしないものは、神には受け入れられません。

他の人のために神の御心を求めることはやめましょう。神ご自身が彼らを導いてくださるからです。神が私たちを導いてくださったのなら、他の人たちも導いてくださいます。あることが、自分から見て神の御心と思えないからといって、他の人に対しても御心ではないと決めつけると、そこで、人を裁いてしまうことになりかねません。神ご自身が責任を負われるのです。そこに、私たちの助けは必要ありません。神が誰かをすでに許されたのに、私たちがその人を批判し続けることがよくあります。私たちは神より正しいとでもいうのでしょうか？そのような罠におちいることがありませんように。神が兄弟の過ちを負い、それに耐え忍ばれるのなら、私たちも同じようにすべきではないでしょうか？神が覆い隠されたものを、さらけ出すことはやめましょう。他の人たちを裁き続けることは、人間として無益であり、自分にとっても恥ずべきことです。人は、神が自分にどれだけ憐れみ深くあったか、すぐに忘れてしまうものです。

この困難な時代にあって、神の子供たちが示すべきものは、厳しい裁きではなく、優しい愛です。主にある兄弟が、あなたのために、いつまでも痛みに満ちた涙を流すことがあってはいけません。むしろ、隣人の傷口に、よろこびのぶどう酒と聖霊の油を注ぎ、優しく包み込んであげなさい（ルカ 10:34 参照）。その人たちには慰めをあげなさい。裁いてはいけません。

9.静けさ

今日の信者たちが持つ欠点を、私は見てきました。それは、話し過ぎることです。このために、彼らは『落ち着いた生活をする（第１テサロニケ 4:11 前半）』ことができません。性格的に自分から進んで話さない人もいますが、ほとんどの信者はこの点、あまりに積極的に過ぎるようです。神の恵みを多く受けた人ほど、静かに頭をたれるものです。しかし、キリスト･イエスの中に、まだ十分深い根を下ろしていないものは、軽薄で、言葉多く話し過ぎるきらいがあります。

箴言 18:2 にこう書かれています、『愚かな者は英知を喜ばない。ただ自分の意見だけを表わす。』まさに、このとおりです！神のうちに、自分の足がかりができていない人ほど、自分の良いところをひけらかすものです。しかし、主にくり返し触れられると、誰もが、こう語ったエレミアのようになります、『私はあなたの御手によって、ひとりすわっていました（15:17 後半）。』静かな生活は、キリストの香りを放ちます。あまり多くを語らない人が話す時は、その言葉に重みが加わります。反対に、いつも話し過ぎる人には、霊的ないのちが欠けています。

主は、聖霊のことで次のように語りました、『御霊はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです（ヨハネ 16:14）。』イエス様は、御霊に関してこうも言われました、『御霊は自分から語るのではない（ヨハネ 16:13 後半）。』御霊で満たされている人は、キリストの愛から来ているものでなければ、誰に対しても、何ひとつ語らないものです。自分の中から出てくるものは、言葉にしません。自分が言いたことがあって話すのではなく、主から何かを聞いて初めて話すのです。この意味で、聖霊に対してほんとうに従順であれば、日々、私たちが口に出す言葉は半分以下にまで少なくなり、そうすることで、主に栄光を帰すことになります。聖霊ご自身は言葉で主を讃えます。自分が聖霊で満たされていると言うなら、同じようにすべきではないでしょうか？

自分が知っていることを、人に言いたがるのは自然なことです。自分より成長した兄弟に教えてもらったことの一旦しか理解できていないのに、私たちはよくこんなふうに言います、『そのことはもう知っている。実際に、この通りにしてきた。』主のしもべが語る宣教を聞いた後、言われたことをさっぱり理解できない他の聴衆と自分が違うところを見せたいがために、わざわざ質問したくなることがあります。しかし、自分も何も分かっていないことに、気づいていません。話したくてたまらない気持ちは、知識の浅はかさの裏返しです。一方で、静かに生きることは、本当の知識ある人生を送っている証拠です。

気持ちが高ぶる中でも、言葉に出さず、静かなままでいるのは、簡単にできることではありません。周りが沸き立っているときほど、私たちは遠回しに、時には、はっきりと自分の利口さをひけらかすような言葉を出したくなるものだからです。騒ぎ立てる人たちに影響されず、気持ちを沈めたままでいられたら、とても素晴らしいことです！侮蔑の言葉を受けても、自分は陰口で返さず、静かな心でいるのは誰でもできることではありません。私たちの内なる人が穏やかなとき、人の前だけでなく、神の前でも静まっていられたら、どれだけ良いことでしょう。

平穏な生活とは、霊的に静まっているだけではなく、外の世界の状況に動かされないことも意味しています。言葉が少ないだけではないのです。この世には、性格的に口数少ない人もいます。しかし、霊の静けさを持って生まれてくる人は誰もいません。無口な性質の人も、心のうちは、他の人たちと同じくらい、あるいはもっとひどく、荒れ果てているかもしれません。しかし、心が静まっているものは、普通は言葉少ないものです。口を硬く閉じて、余計なことをしゃべらないようするのは、心の静謐とは違います。そこにはすでに、内なる動揺があります。心の奥深く十字架が働いていなければ、内から静まる道はありません。聖霊が十字架の真実を私たちの内なる人に知らせてくださり、主にすべてを支配していただいてはじめて、私たちは神の前に静まることができます。

私たちの主は、この見習うべき気質を持っておられた方でした。例えば、民衆が主を国王として祭り上げようとした時、主は荒野へと退きました（ヨハネ 6:15 を参照）。また、主はピラトの前に立たれた時、何も言いませんでした。何を訊かれても答えず、ただの一言さえも、口に出されなかったのです（マタイ 27:12～14 を参照）。外に向けて言葉を発しなかったのは、心のうちに揺らぐところがなかったからです。

10.孤独の日

私は昨今、いつも不安を感じています！何かを無くしたかのようです。私は、ここを出て、聖人たちと交わり、この孤独な心を慰めてもらえたらと願わずにいられません。こんな日を一人で過ごすのは、本当につらいことです！このような心の状態のまま、きちんとした暮らしを続けてゆくのは容易いことではありません。しかし、そうしなければ、動揺したままのたましいを、そのたびに抑え込むしかありません。

ああ、主よ、私は自分のたましいの赴くまま、いたずらに行動しないようにします。あなたの御霊が私の心のうちで働いているからです。今、この状況の中で、あなたは私のたましいと霊を分けることを望んでおられます（ヘブル 4:12 参照）。それは、私の霊が天にのぼり、主イエス様の御霊とひとつになるためであり、こうして、私は自分のたましいの高ぶりに、つき動かされることがなくなるのです。私は苦しい。本当に苦しんでいます。しかし、この苦しみに耐えられ、この日のために神が定めた道から逃げなければ、たましいはもう、私を支配することはできま

せん。主が、私を鎮めてくださいますように！

11.決して渇かない

私たちの主は永遠の賛美に値する方です。それは、主がこの地上におられた時に言われた、この言葉の故です、『わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことがありません（ヨハネ 4:14 前半）。』この言葉はまことであり、そのまま受け入れるに値するものです（第 1 テモテ 1:15 前半を参照）。主がくださったもののおかげで、私たちは永遠に満ち足りていられるからです。主は、ご自分が下さったものを、よく分かっておられます。しかし、残念なことに私たちの方が、それを受け止められないことが多いのです。そのため、すぐにまた、また渇いてしまいます。私たちは絶えず、渇きを味わっているのではないでしょうか？私たちは満足することなく、もっと多くのものが必要だと感じます。しかし、愛する主の言われたとおりにならないことは決してありません。主の言われることは永遠に真実です。問題は私たちの側にあります。私たちの信仰が足りないだけであって、他に何の理由もないのです！ただ、主の御ことばを信じさえすれば、二度と渇くことはないはずです。主が約束された、生ける水は、人の乾いた心を潤し、どんな時も必ず、私たちの思いを満たしてくれます。神の約束を信じるほど、私たちのうちにある神のいのちは湧き立ちます。ああ、信じない者の心は何と哀れなものでしょう！主が恵みを見せてくださって、私たちも、主を信じるだけでなく、主のうちに休むことができますように。主が、すべてを満たしてくださることを知っているものは幸いです！もう渇くことがない者こそ幸いです！

12.休息

休むべき場所は、主のもとにしかありません。私たちは、主のうちにだけ休息します。自分が住む社会、知識、健康、気持ち、または、霊的な経験の中でさえ、他の安らぎを求めようとすれば、それがどれだけ、はかないものか、すぐに気づくでしょう。私たちは、揺れ動く土台の上で、打ちのめされてしまいます。主ご自身が、私たちの休む場所としておられることに、感謝しましょう。この地上のどこにも、私たちの休むところはありませんが、主のうちに安らぎを見出すことができます。主は、私たちの『強いやぐら』だからです（詩篇 61:3）。

私たちは主の愛のうちに休みます。それは永遠の愛であり、私たちをどこまでも抱擁してくれる愛です。この愛のゆえにこそ、主イエス・キリストは地上へと降りてこられ、十字架にかけられ、死者の中からよみがえり、再び天へとのぼり、私たちのために取りなしてくださり、そして、居場所を備えていてくださいます。それだけでなく、主はまた再び来られ、私たちを御許に受け入れてくださいます。驚くべき愛ではありませんか！この主の愛は、人の舌や声で伝えることはできません。神はこれほど愛してくださるのに、なぜ、私たちは主のもとに心から憩うことをしないのでしょう？何が降りかかろうと、思い煩うことなどなく、ここまで愛してくれる方の下に休むことができるのです。

それに加え、私たちが主のうちに安らぎを見出すのは、主の知恵の故でもあります。主の知恵はすばらしいもので、決して間違いを犯しません。主は、物事の順番を整え、私たちと共に、前へと進んでくださいます。私たちの身に降りかかることは、すべて主の知恵によって、注意深く備えられています。主は、ご自身を愛する人々のために、すべてを働かせて益とすることをご存知です（ローマ書 8:28 前半を参照）。時に人は、困り果て、途方にくれることもあるかもしれません。しかし、主は私たちとは違います。すべてを支えてくださるだけでなく、取るに足りない小さなことまで計画されています。なぜ、思い悩むのでしょう？主は、あらゆることに知恵を持っているのではないでしょうか？

私たちはまた、神の力強さのうちに休むこともできます。神の腕に守れないものはないからです。神の力の強さを、誰が測れるでしょう？主は、最善の計画を立てられるだけでなく、その計画を実現させる力を持っています。主には、神の子供たちを救い上げる強さがあり、悪魔のすべての企みを跳ね返す力があります。神は永遠の勝利者だからです。この神の力が、私たちにも働いています。

ああ、恐れ、震えている兄弟たちよ、ともに主のうちに休みましょう。この力あふれる方こそ、私たちの父なのですから。主が助けてくださり、私たちも苦しみの中で、主の安らぎを見いだして、慰めを受けられますように。私たちが主の愛、知恵と力に寄り頼み、無益な悩みから解放されますように。

13.おごり

若い信者が持つ危険のひとつであり、年かさの聖人さえも陥りがちな罠は、自分を間違ったところに置いてしまうことです。十字架が心に働きかけて初めて、自分を誇示することをやめ、他の人こそ誉れを受けて欲しいと望むようになります。このような人は、神の前に静まり、主への怖れの中にあっても、気持ちは安らいでいます。キリスト者の生活は、一瞬たりとも、十字架と切り離すことはできません。神の聖霊が手を差し伸べて、私たちの堕落しきった状態をさらけだしてくれます。私たちは、神の霊の訓練を通して、自分の絶望的な状態を、真摯に受け止めることができます。そうなったら、あえて自分を誇ることはなくなり、むしろ、自分を恥じるようになるでしょう。神が、私たちの本当の状態を明るみに出され、自らの目で確かめられるようにしてくださったからです。自分を知るほど

に、誇る気持ちは消えてゆきます。本当の姿を知らないのは哀れなことです！神の光のうちに光を見ることができますように（詩篇 36:9 後半を参照）。

自分を誇る強さにもいろいろな段階があります。聖人の中にも、高らかにラッパを吹き鳴らす人がおり、また、穏やかな言葉で自慢をする人もいますが、そのどちらにも、自画自賛したい気持ちが隠れています。あるものは、自尊心からうぬぼれを持ち、自分が他の人より強いと思い込みます。あるものは、嫉妬心から自分を持ち上げ、他の人と対等だと思い込もうとします。これは、すべてが肉の働きです。動機が何であれ、確実に危険へと導いてゆきます。

創造主ではなく、被造物を拝むことは、人間がよく犯す過ちのようです。主が、人間に栄光や名声を与えたら、そこには必ず、英雄崇拝が生まれます。人の賞賛を受けたくて、意図的に目だった行動をするとき、そこに他の人を讃える言葉がなければ、私たち自身も地に落ちてしまいます。外からは、ある程度、霊的によい状態に見えたとしても、霊的な戦いにおいては、私たちは破れ、地にまみれているのです。今日も、数え切れないほど多く、敗北を伝える知らせが舞い込んでいます！この知らせの中に、神の誉れとなるものなど、何ひとつありません。ですから、私たちも人を批判することのないよう、主よ、助けてください！神への賛美のようでありながら、人への賛辞、自分への賛辞が隠されていることが多くあります！ああ、私たちは心の中で、人が神を讃えるよう願いながら、同時に自分も誉めて欲しいと、望んでいるのではないでしょうか！神のための働きなのに、神が置き去りにされていることが多くあります。これでは、横で見ている私たちは、誰に寄り頼めばいいのか、分からなくなってしまいます！自分を讃えることで、自分を義とすることなど、決してできません。

キリストにおいて幼子であったとき、私もそうしていなかったでしょうか？人から賞賛を受け、働きをほめられたとき、心はどれだけ踊ったでしょう！主が私たちの姿を知らせてくださって、人目につかずに、静まっている本当の神の人たちの中に入れますように。

14.何かが欠けている

主イエス·キリストの御心は、私たちが完全になることです。『キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです（エペソ 5:26-27）。』これが、主の望まれることであり、主が定められた御心です。私たちは、この御心に沿った生活から遠く離れてはいないでしょうか？確かに日々、御心を追い求めてはいますが、目標から遠く離れています！主イエス・キリストは、私たちに完全なものになってほしいのです。この世さえも、私たちにそれを望んでいます。完全でなければ、キリストを喜ばせることも、たましいを主のもとに近づけることもかなわないからです。

私たちはおそらく、初めに信じたときより、前に進んでいるでしょうし、実際に大きく、進歩してきたと思います。それでもまだ、私たちの人格と行動には、数多くの小さなしみやしわがあります。聖書に書かれているこのことばと、なんら変わるところがありません、『死んだはえは、調合した香油を臭くし、発酵させる（伝道者 10:1 前半）。』死んだハエがどれだけ、たくさんいるのでしょう！よくこんなことばを耳にします、『あの人は本当に主を愛しているけど、気性があまりに激しい！』あるいは、『この人は熱心なのは確かだけど、自尊心が強いところがある。』人の香油の中に、死んだハエを見つけるのは簡単なことです！主が私たちの目を開き、自分の中にも、数多くの死んだハエがいることを、見せてくださいますように！

キリストの愛に満ちた心から、私たちは時に人を助け、救います。しかし、ほどなくすると、不安を覚えます。私たちが進む道に敵が攻撃をしかけるからです。主に用いられて、人を助けた時など、これは自分の手柄だと思いこみたくなります。あるいは、どれだけの苦難にあい、例え、死んでもよい覚悟で、異国に赴き、主に熱心に仕えたとしましょう。それなのに、故郷に帰ったとき、苦しみ、疲れきった自分に、愛する人たちの誰も、賞賛のことばをくれなかったら、地獄の炎が体の中で燃え上がります。ある時は、もう決して誰も批判しないと誓いを立てたのはずなのに、気が付くと人にこんなふうに言っています、『忠告しますが、もっと、主に祈らなくてはいけません。』また、別の時には、キリストの愛に動かされて、自分もすべての兄弟を愛することを決意しますが、いつの間にか、冷淡な態度をとるようになり、離れていたのだから仕方ないと言い訳します。ああ、日々の生活にどれだけの死んだハエがいるか、誰に分かるでしょうか！清くありたいと願うなら、このことを心に留めておくべきです。ベルゼブルとは、『ハエの王』と言う意味であり、サタンは隙あらば、私たちの生活にこのハエを送り込んで、霊的な成長への思いをくじこうとしています。

いつも、何かが欠けているのです。多くの間違いを犯しながら、その罪を告白しようとせず、また、主に自分を洗い流してくださいと頼むこともしません。それが、肉にとっては耐え難いことであり、大きな痛みをもたらすからです。サタンに立ち向かい、かつて奪われたものを取り返しましょう。そうすれば、気づかないうちにサタンに食い荒らされることはありません。ぶどう畑を荒らす小狐を捕まえましょう（雅歌 2:15 を参照）。

古いパン種を取り除き（1 コリント 5:7 を参照）、あちらこちらにある、『少しの愚かさ』を消し去って（伝道者 10:1 後半を参照）、私たちの父が完全であるように、私たちも、完全な大人になりましょう。

15.信じる者を助ける手

『モルデカイはエステルに返事を送って言った。「あなたはすべてのユダヤ人から離れて王宮にいるから助かるだろうと考えてはならない。もし、あなたがこのような時に沈黙を守るなら、別の所から、助けと救いがユダヤ人のために起ころう。しかしあなたも、あなたの父の家も滅びよう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、この時のためであるかもしれない（エステル 4:13-14）。』

この一節を読む度に、私は大きな警告が発せられているのを感じます。エステルから見て、異邦人の兄弟であったユダヤ人たちは、この時代、大きな危機に直面していました。いずれ、絶滅させられる運命にあったからです。女王エステルの他に、彼らを救うことのできる人がいないのは明らかでした。モルデカイがエステルに伝えたことばは、まことに神の警告、兄弟を救う手立てを持ちながら、尻込みしているすべての人に向けられた警告と読み解くことができます。

神の御心は、ユダヤ人たちを救い出すことにありました。神はすでに、ユダヤ人たちを虐殺から救うことを決意されていました。神は、エステルに女王の位を賜り、ユダヤ人たちを救う手立てとして働くことを求めました。エステルが御心にかなわなければ、民を救い出すために、神は他の手だてを探すしかなかったでしょう。しかし、エステルは神の栄光を体験し、人を救う喜びを学びます。

今日、神の子供たちは多くのものを必要としています。霊的な欲求だけではなく、たくさんの肉体的な必要も抱えています。神に仕える多くのものが、全てを主のために捨てています。『彼らは御名のために出て行きました。異邦人からは何も受けていません（第３ヨハネ７節）。』なんと、貧しい人たちだったでしょう。しかし、神は彼らの必要をすべて満たすと、約束されました（ピリピ 4:19 を参照）。神は、ご自身を信じる者に、辱めを受けさせることはないからです。これが、神の御心であり、決心です。

主は、用いる器をご自身で選ばれます。それは、主のために生きる、通りよき管です。神は、あなたや私に誉れをたまわり、ご自身が器として用いる人間を安全に守る力を、私たちに与えてくださいます。神の子供たちを助けるために何かを差し出すことは損失ではないし、また、誇りとすべきことでもないと、しっかり理解しなくてはなりません。事実、神は私たちを知っておられ、認めてくれています。主が、私たちを用いたいと望んでおられることは、大きな誉れです。神からこの栄誉を受ける機会を、見過ごすことがありませんように。それでも、私たちが応えることができなければ、『別の所から、助けと救いが起こる』ことになるでしょう。

主があなたを用いたいと思われているのに、あなたは尻込みしています。主には、他の手立てがないと思いますか？主には、いつでも、『別の所からの助けと救い』があるのです。しかし、主が他の助け手を探すことになれば、あなたは王に語りかける機会を失ってしまうのです。そうなれば、あなたが神の良い御心を敬っていないこと、主の好意を無にしたことが現れてしまいます。あなたは、自分が神の御心に応えられなかっただけでなく、御心を果たすために他の手立てを探すという、ご自身の望まない立場に、主を追いやることになります。

それでも、神は尽きることなく、支えてくださいます。主の御心とは、主の奇跡をともに行い、主の働きに加わる仲間として、私たちを迎え入れることにあります。しかし、私たちがすべて、失敗したとしても、主は天からマナを降らせ、預言者の食べ物を烏に運ばせてくださるのではないでしょうか（申命記 8:2～3、第一列王記 17:4～6）？主ご自身が、『別の所から、助けと救いを起こす（エステル 4:14 後半）』ことができるのです。哀れなのは、私たちの方に、神と共に働く喜びと栄光を求める気持ちがないことです。主との間に秘めた交わりを守ってきたものは誰でも、主とともに働く大切さを知っており、報酬を受けています。主の心を知る者は誰でも、主の悲しみも知っています。

もし主が本当に、私たちの霊とたましいを分けるために、ご自身の言葉を使われ（ヘブル 4:12 を参照）て、霊の支配を経験させてくださるなら、私たちは確実に主の御心と一致することになります。主に取ってよいことは、私たちにとっても良いことだからです。神の子供たちがこの地上で行うことから、私たちが離れることはなく、気持ちはそこに向けられています。最後に、いつでもこの厳しい御言葉を心に留めておきましょう、『あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、この時のためであるかもしれない。』あなたの今の豊かさは、人に今日、与えよという、召しなのです。

16.忙しい

『忙しい』とは、よく使われる言葉で、誰でも知っています。しかし、主がくださる重荷は、軽く、荷いやすいものです。主は決して、かつげないほど大きな重荷を、人に背負わせることはありません。これは、私たちが霊的な理解を進めて行く上で、最も大切な真理です。この事実こそが、大きな慰めをくれるからです。キリスト者の中には、『私はとても忙しい、』とか、『私は忙しすぎる』、といった言い訳がすぐに口を突いて出る人がいます。彼らは、夜明けから日没まで働きづめで、休む時間もありません。彼らの重荷は、とても大きいように見えます。ここで言っているのは、いわゆる世俗の信者の日常生活のことだけではありません。主の『働き』に直接、参加している人たちにも、同じことが言えます。神の子供たちは、一日中、忙しくしていて、一人、静かに神と向かい合う時間がありません。これは、決して神の望むことではありません。主のために働く人たちは、朝から晩まで、魚を獲る網を投げ

ています。網を繕う時間すらありません。これが、神の御心であるはずはないのです。

率直に言わせてください。このような忙しさのほとんどは、まったく不必要であり、何の役にも立ちません！神の子供たちには、忙しく立ち回ることをやめて、じっくり考えてもらいましょう。そんなに必死で働かなければ、仕事をやり残してしまうでしょうか？私が、少しでも手を休めたら、誰かの生活に支障をきたすでしょうか？こんなに忙しくしていることはないと思うのですが、私たちはいつでも、何かに忙殺されています。これは、サタンがそうさせているか、または、周囲の状況に求められているのではないでしょうか？周囲の状況とサタン、どちらも、過酷なものです！サタンは、ある時は引き、また、あるときは押すと言うふたつの戦略を使います。サタンは、霊的な成長を求める想いから、人を引き離そうとしたかと思えば、別の時には、過剰なまでに時間に追われる状態へと追い込みます。私たちの忙しさの多くは、実は、サタンの戦略かもしれないのです。周囲の状況に関して言えば、片時たりとも、その要求が止まることがあるでしょうか？一時間ごと、一秒ごとに、私たちに何かを求めてきます。周囲の状況が、私たちが働く上での尺度であると、考えることすら間違っています。

私たちの忙しさは、周りの状況が引き起こすものであって、まったく不必要です。キリスト者が働くとき、神の御心が完全な尺度となります。一日中、働きづめになっても、終わらないこの仕事は、神に頼まれたものですか？そうでなければ、なぜ、そんなにかかり切りになっているのでしょう？実は、私たちを手一杯にしているものの多くは、この世の瑣末で、意味もなく、必要もないことです。一日中、そんなことをさせるために、神は私たちを召したのでしょうか？日々、働くさまをじっくり、見直してみれば、時間配分を単純にし、自分が直接、関わる用件を減らすことができるはずです。よく言われるように、あまりに忙しすぎると、人の心は混乱し、内なる静けさを失うことになります。

『マルタは接待のことで忙がしくて心をとりみだしていた（ルカ 10:40 前半）。』主は、私たちが、ご自身の内なる静けさの中にあることを望んでいます。主は、マルタの妹、マリアが選んだ、良いほうのものを失って欲しくないのです（42 節参照）。主の報償を受けるのは、多く働くものではなく、神の御心を誠実に行う者たちであると、心に留めておくべきです。主の御心にはないことで、たくさん働いても、何の益があるでしょう？『接待のことで忙がしくて心をとりみだす』のは良くないと言っても、それは、与えられた働きをしないということではありません。それが意味するのは、主の喜びのほうをより多く求めること、そして、主と交わる時間をもっと多く持つことです。簡単に言えば、日常のことではなく、祈りで忙しくありましょう。生活の細々したことではなく、代わりに祈りで精一杯の暮らしをすれば、ずっと多くのことを成し遂げられるでしょう。

17.何をするにも、主に対してするように

信者は誰もが福音を伝える働きをするべきです。とは言え、すべての人が説教師となるよう召されているわけではありません。キリスト者の日々の働きは、何であれ、すべてが、神の働きであるべきです。ほとんどの信者は、外に出て働き、自分と家族を食べさせなくてはいけません。神のために働くものは、主に仕えており、その労働に対する報酬を受け取ります。彼らは、仕えるほどに、その働きとの関わりも深まり、喜びを持って打ち込むことになります。これに対して、一般の信者の状況は、ずっと込み入っています。彼らは、この世の仕事で手一杯になっています。仕事の虚しさから解き放たれる道があっても、自分と家族が生きて行くためには、そんな生活をやめるわけにはいきません。こうなると、そこに喜びなどありません。

これは、主にある姉妹にとくに、よくあることです。主を愛する多くの姉妹は、仕えたい気持ちを持ってはいますが、家族がある以上、妻であり、母親でもあるのです。みな、掃除、料理、子供の教育と世話といったこの世の義務に時間を割かざるを得ません。このような仕事でほとんどの時間を取られてしまうので、思うように主に仕えることができない自分を見出すのです。こうして、女性たちは心に悲しみを抱えることになります。

これに加え、福音を伝える働きの中で、自分の行いに神の臨在を感じ取ると、人は、それが神の御業だと信じます。今日、子供の頼みごとを聞いたり、人の話しを聞いたり、職場に静かに座っていたり、台所で忙しく立ち回ったりと、この世の雑事に振り回される中で、姉妹たちには、神の臨在を感じることなど、とてもできそうに思えません。それでも、主は、私たち信じるもの、すべての父ではないでしょうか？『御父』と言う呼び名には、愛に満ちた思いやりと、優しい哀れみが込められています。神はどれだけ、私たちのことを気にかけていてくださるでしょう！

福音のために汗を流すものは、誰でも神の子供です。この世の問題に対処する人たちも同じです。主は、福音を伝えるものを助けてくださいますが、生活のことで精いっぱいのものにも、同じように、気を配ってくださいます。全てのはたらきの中で、神に会い、神の臨在を体験したいと望むなら、この言葉を覚えておいてください、『何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心からしなさい（コロサイ 3:23）。』これが、信じるものたちへの福音です！神を讃えましょう！神は、私たちが直接、おこなった労苦だけでなく、間接的な貢献も等しく、受け入れてくださいます。『何をするにも』という言葉は、私たちが神に仕えたいと願って行う、罪の混っていないすべての労働をさしています。したがって、子供の世話をする母親たちも、主のために働いていると考えてよいのです。家事をする妻たちも、同じように神のための労働を行っています。会社で働いて生計を立てている人、仕事で誰かを支えている人たちも、やはり、主のために働いてい

ると考えることができます。何をするにも、主に対してするようにする。このことを、忘れないようにしましょう。

何をするにも、『おお、主よ、これはあなたのためにします！これをしているのは、あなたのためです、』と、主に向かって言えますように。こうすれば、この地上で行うすべてを、主に対してするものとして、聖化し、清らかに行うことになります。私たちは、あらゆることにおいて、主に仕えることが可能です。そして、はっきりと、なにか特別の働きに召されたときは、その中でも同じように、主に従順でありましょう。

18.神とふたり

神の子供たちも、群衆の中で、主との交わりを失うことがよくあります。私たちの日々の暮らしは、心をかき乱すもので囲まれています！霊的な生活に、悪い影響を与えるものが、生活の中に満ち満ちています。いつも人と接していると、信者の霊的ないのちに悪い影響が及び、神との対話が損なわれることすらあります。

よく人に聞かれます。神の臨在をより強く感じ、神の御心をよりよく知るにはどうしたらいいのですか、と。私の答えは、もっと多く、神との交わりを持つこと、神と二人きりになり、神のみ言葉をじっくり、かみ締めることです。主のなさったことを思い、また、主の考えをよく理解しましょう。主に、あなたの悲しみと喜びを語ってください。主の前に静まり、天を見上げ、主のかすかな声を聞き、そして、愛する主の顔を見上げましょう。一日に、少なくとも30分（できればもっと長く）、主と二人だけの時間を過ごすべきです。家族や友人から離れ、聖書だけを持って、一人で荒れ野に向かい、岩の裂け目に一人で座るか、または、自分の部屋に閉じこもってください。主の前にひざまずき、静まって、父なる神と御子である主イエス·キリストとの交わりを持ってください。そうすれば、神の全能の力が、あなたの生活の中に現れます。主の臨在、主の栄光、主の愛、そして、主の喜びを、毎日のように経験することになるでしょう。

私の見るところ、今日の信者たちに大きく欠けているのは、神と二人だけで過ごす時間です。信者は、人間どおしの交わりは、とても大切にします。人としゃべることは好きですが、神と交わることを忘れています。エレミアが言ったこの言葉のようになれたら、その方がずっと良いことではないでしょうか、『私はあなたの御手によって、ひとりすわっていました（15:17後半）。』空高く、昇ってゆく鳥は、他の鳥たちと群れていません。いつも、一羽だけで、はるか遠い空へと舞い上がってゆく鷲を見れば分かります。信者の霊的な生活が健康であるほど、付き合う仲間の数も少なくなるものです。その信者は、他の人たちと働き続けることは、もうできそうにありません。主だけが、その人の仲間となったのです。他の人たちとは、うまくやってゆけません。これが聖なるものの、孤高です！

そんな神の聖者のことを、詩篇の作者はこう歌っています、『屋根の上のひとりぼっちの鳥のよう（詩篇102:7）。』その生活の中には、世に知られていない、ある種の静けさ、安定と平安があります。このような兄弟の中には、主の臨在が、はっきり現れています。この人たちの言葉、行動、考えの中には、『天なるもの』があります。彼らがこの世ではなく、天のものであることが、そこから分かるのです。この人たちは汚されていない、天の空気を吸っているようです。

世から離れている彼らには、清らかな空気が漂っています。これが人々の心を動かします。まさしく、『静寂が声に勝る』のです！とは言え、これを見て、古い時代の僧侶のごとく、人との関わりを断ち切るよう召されていると考えるのは間違っています。それが意味するのはただ、彼らが霊において世から離れていることです。事実、彼らは神とその御心を知り尽くしているからこそ、人を深く愛することができ、自分自身も愛されるのです。この人たちは、根本的に考えが違っているのではなく、むしろ、霊においては天の人でありながら、肉においては、主の愛とやさしさに満ち溢れています。それでいて、彼らは毎日、人との関わりから遠ざる時間を求めて、主との静かな時を持つことを大切にします。これこそ、真に祝福された生活と言えます！

19.主を愛せよ

主は愛するに値する方です。愛の経験について言えば、献身は、この経験の始まりであり、終わりでもあります。愛のあるところには、いつでも、献身があります。今日の信者は、より多くの愛と献身を求める気持ちが欠けています。愛があるところ、献身は必ずついてきますが、献身があっても、愛は常にあるとは限りません。『たとい、私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ（第1コリント13:3後半）。』この状況は実際に起こりうるのです。外に現れる行動はすべてが、心の内に沸き起こる深い愛に動かされたものでなければなりません。そうでなければ、私たちの主は、献身を受け入れてくれません。その献身は、外に向けた形式にすぎず、まず心に愛があって、そこから生まれたものではないからです。私たちが愛に燃えていますように！主のために労苦し、自分自身と持てるすべてを、愛を持って捧げられますように。『私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと真実をもって愛そうではありませんか（第1ヨハネ3:18）。』

一方、心の中だけで主を愛しても、外に向けて表すことがなければ、その愛はあまりに弱々しいものです。お金であれ、物であれ、信者の持てる富の扱い方は、そこに主への愛の広さが現れる温度計です。あなたが持つ富のうち、どれだけの部分が主のために使われていますか？どれだけをあなた自身、家族や子供たちのために

使っていますか？この質問への答えで、どこまで主を愛しているかが分かります。主のための働きを、生活や子供の世話よりも、軽視していないでしょうか？乏しい中から捧げられるものと、あり余る中から捧げられるもの、主が喜ばれるのはどちらでしょうか？（ルカ 21:1～4 を参照）

主を愛するものの多くは貧しい人ですが、中には比較的裕福な人もいます。心に愛があれば、貧しいものも銅貨二つを持つのです。本当に主を愛していたら、ふたつの銅貨にあたるものを捧げずに、取っておくことなどできるでしょうか？言い難いことですが、金持ちが捧げるものが、主には食卓から落ちるパンくずのように見なされることは、良くあるのです。『あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。』（第 2 コリント 8:9）ですから、私たちも主のために、貧しくなるべきです。主の働きを支えたために、日々の生活に必要なものが得られなくなることなど、決してありません。

裕福なキリスト者が主を真に愛していれば、神の聖なる働きを支えながらも、生活に必要なものを何ひとつ切り捨てずにいられます。銀行に預金したお金は、回り回って主に用いられます。彼らが生活の何かを犠牲にしなくていけないとしても、それによっては、主の心はどれほど喜ぶでしょう。捧げることの喜びを知っている人は、なんと少ないことでしょう！この訓戒の言葉は、一般の信者だけではなく、主に仕えるものにも、そのまま当てはまります。収入が限られていても、愛をこのようなかたちで現すことをやめてはいけないのです。旧約聖書の時代のレビ人も十分の一を収めていたことを思い出してください（民数記 18:26 を参照）。私たちは、主に仕えながら、神のお金を使っているのかも知れませんが、それでも、涙とともに捧げるものを、主が喜ばれいことは決してありません。

（注意しましょう。私たちが与えるものは、主の働きのためです。キリストの真実から離れてしまった教会は数多くあります。彼らが伝えるものは本物の福音ではなく、彼らがすることは神の御心に沿ってはいません。したがって、与えるときは慎重に考えて、神が受け入れるものだけを与え、異説を伝えるものを助けないように気を付ける必要があります。）

最後にひとこと、付け加えさせてください。あなたが持てる富、時間や力を埋もれさせてしまえば、いつか、それを主のために使わなかった過ちを後悔する日が来るでしょう。

20.キリストを想う

新約聖書の 4 冊の福音書は、主イエス様の一生を完全なかたちで広げてくれます。マタイによる福音書は、イエス様を主として、マルコによる福音書は僕として、ルカによる福音書は人として、そして、ヨハネによる福音書は、神としての主を現しています。福音書を読むとき、私たちはよく、ある過ちを犯します。キリストの言葉と行いだけに目を留めてしまうのです。確かに、主の言葉と行いは、人の心をしっかりと捉えるものですが、それでもやはり、私たちはこの間違いを犯してしまいます。すなわち、あるべきかたちでキリスト自身を見ることがほとんどできません。主の言葉と行いを学ぶ目的は、生けるキリストを知ることにあります。

ですから、私たちは、まず、神が現されたものをじっくり考える時間を持ち、その上で、キリストから示されるものを考えなくてはいけません。心を静め、聖書を開き、そして、地上での主の素晴らしい生涯が現れた一節を読みましょう。主の知恵、恵み、忍耐、慈愛、美しさ、柔和、やさしさ、従順、そして、哀れみを噛みしめてください。主のいのちがページから飛び出して、心が主への燃える愛で湧きかえるほど、主のことを思ってみましょう。主はかけがえのないお方です！心から愛すべきお方です！とてもやさしいお方です。

私たちは静かに主を思い、主がやさしく示される道が、目の前に開けるのを待ちましょう。それが、私たちを御そばへ引き寄せ、主への賛美と渇きを覚えさせます。まだ主を完全に自分のものにしていなくても、その時、私たちは主の愛を味わったのです。主の哀れみ深く、恵みにあふれた行いを深く思えば、私たちのいのちも、主の哀れみと恵みを現しはじめるはずです。例えば、税金をカイザルに納めることについて、主はその権威がどこにあるか、傑出した判断を示されました。そこで、主イエス様が用いられた知恵を私たちは良く知っています。主が地上でされたのは、このように、素晴らしいことばかりです。キリストの人がらに思いを巡らしてみてください。そうすれば、必ず、生けるキリストを知ることができます。救い主を、よりよく知ることができますように。

21.思いやる心

神なる生活の中に、人への思いやりに欠けることがあってはいけません。信者でさえ、生活のうちに、神の恵みが完全に働いていないと、人に対して冷淡で無関心な行動を示すことはよくあるものです。例えば、人のことで心を痛めたり、相手が直面している困難に同情することをしないのです。人への無関心というこの病いは、聖者の間にもよく見られるもので、実は、最も成熟した聖者にすら、あるのです。人への思いやりをなくするのは、気持ち

が緩んだときです。このようになってしまうのは、自分の心を完全に抑えることができない人ばかりです。人に無頓着なのは、自分の心を完全に統制できていないものの性格だからです。その心は、いつも千々に乱れており、気持ちを一点に定めることができません。この人は、必要なときも、その場の状況に集中できず、そのため、思慮に欠けているのです。他者とのやり取りにおいては、軽率になりがちです。

自我を大切にしすぎることは、思いやりを無くする大きな原因となります。そのような人は、他者の求めるものに無関心ですが、それは、自分の個人的な関心ごとばかりに心を傾けているからです。例えば、人が寝ているとき、気づかずに物音を立てます。（悲しいことに、時に、それは祈ったり、聖書を読む声なのです！）あるいは、仲間たちと集うとき、個人的な都合に合わせるため、他の人たちを待たせることもあります。また、自分を守るという目的のために、他の人を非難すらします。自分の利益のためには、人を傷つけることすらいといません。このような行いはすべて、十字架の精神が欠けていることから来ています。自分で気づいていても、いなくても、他の人をかえりみず、相手への思いやりを忘れることは、誰にもよくあります。時には、悪気のない、無邪気な考えから、このようにしてしまうこともありますが、それでも、人の心を傷つけてしまうのです。またある時には、人にかかわりを持たないのは、率直で偽りのない気持ちの現れであって、心の中身を隠すことなく出しているのだから、むしろよいことだと考えさえします。

しかし、意図的ではなく、自分で気づいていなかったとしても、人に対して厳しくあることは、御霊の実ではありません。いつでも思いやりにあふれ、人が求めているものを思い、人の困難に同情する心を持ち、また、人を困らせる言葉を口に出さない。こういった行いこそ聖者たちが追い求めるべきものです。主の十字架と御霊の働きは、すべてを打ち壊して作り直す力があり、このおかげで、厳しい性格の人も優しくなれるのです。思いやりのある人になるには、相手の必要なものを思い、苦しみを分かち合う心が必要です。人は、本当の意味で自分のいのちに死ななくてはなりません。そうなって初めて、自分の持つ権利を投げ打ち、苦しみを喜んで受け、他の人のよろこびを求める者となります。私たちは意識が、心を支配するように、自分を訓練しなくてはいけません。そうでないと、心は散漫で、人が求めているものに気持ちが及ばなくなります。『こうして、死は私たちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働くのです（第２コリント4:12）。』母親を使徒ヨハネにゆだねた時の主イエス様のことばが、私たちにとっての最良の手本です（ヨハネ19:26 を参照）。

22.祈りと心の願い

祈りとは、心の真実な願いを神に向けて表すことです。信じる者の祈りに、神がどう応えたか、聖書には数多くの実例が記録されていますが、その祈りはいつも、心の願いから出たものでした。心の奥に願うものがなければ、どうして祈るのでしょう？祈りがすべて本心から捧げられたものであれば、必ず神は応えてくださり、聞かれずに終わることはありません。はっきりした願いが欠けているとき、私たちの祈りは、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じになってしまうのです（第１コリント 13:1 参照）。意味のない祈りとなってしまうのは、うまく作り上げようとしたり、伝統的な形式にとらわれるためです。

この意味で、人前でする祈りは、一人だけでする祈りよりも、害のあるものです。祈りが多くの言葉であふれているとき、その９割は神ではなく、人に聞かせるために発せられています。表現は耳にはとても心地よく、口調には熱がこもっていて、出てくる言葉は、いつも美しく響きます。それでも、すべては人に聞かせるためのものです。その祈りは神には聞かれず、応えられることもありません。心からの願いのない祈りは、神を侮辱するものです。それは、主が忌みきらうものです。

個人的な祈りの中でも、日々、数多くの言葉が尽くされます。その言葉は、よく考えずに口から出ています。聞きなれた言葉ばかりで、みな、同じように響きますが、私たちの心はそれに応えません。こんな祈りは、役に立たないだけでなく、時間の浪費です。神ご自身と、その聖さと権威を本当に知っているものは、そのような祈りはしません。清らかな心で、神の御許に来て、目の前におられる方のことを思うなら、偽りを言うことはできないはずです。事実、私たちには、聖霊が祈らせてくださる以上の言葉を口にしたり、そこに何かを付け加えることなどできないのです。聖霊に導かれていないものは、すべて、見せ掛けに過ぎません。したがって、祈る上で、一番よいのは、何を祈るべきか、聖霊に示していただくことです。そうすれば、神に背くことにはなりません。

神の御前に正直になって、偽ることなく、簡潔に祈ることを学びましょう。人のために祈るときは、特別な注意が必要です。誰かをとりなす祈りは、ただ、借りを返済するために行っていることが多いのです！その祈りは、自分の負債を返す目的で行っているため、そこにはいつも、心からの願いが欠けています。相手に対する真実の愛が心になければ、人のために祈ることはできません。相手の困窮を、自分自身の苦痛と感じるとき、本当の祈りができます。相手に何かが欠乏しているとき、自分も同じ苦しみを感じるなら、真心からの取りなしをすることができます。愛がなければ、声で祈ることしかできません。私たちは、もっと人を哀れむ心を持たなくてはいけません。これからは、言葉だけでなく、心から祈ることができますように。私たちの祈りが、香り高く、神の御許まで届きますように。

23.聖さと厳しさ

キリスト者とはもっとも、理不尽な人たちです。しかし、理不尽でありながらも、誰よりも愛情にあふれています。彼らは、天のことだけを思っています。主イエス様の愛しか持っていないのですから、とても理性的な人たちとは言えません。それでも、その愛は相手を選ぶことなく、すべての兄弟に向けられており、よい人でも、不快な相手でも変わりはありません。敵すらも愛しています。その故、もっとも愛情にあふれていながら、世に対しては、著しく理不尽な人たちです。

さて、聖くあることはキリスト者の目的のひとつです。しかし、よく気をつけていないと、その聖さは、人をつまずかせる石となってしまいます。このような信者は、人に厳しくなりがちで、彼らの聖さが相手を傷つけることがよくあります。キリスト者が聖くなるほど、人の罪が彼らの目に忌まわしいものと映り、これが期せずして、厳しい非難の言葉へとつながるからです。それに加え、キリスト者は、神を知らない人たちを、不合理でひどく子供じみていると、見てしまいがちです。こんなキリスト者は未信者を助けるどころか、批判ばかりしています。不幸なことに、このようなキリスト者ほど、自分は神の標準を守っていて、神の真実をよく証ししていると思い込んでしまうものです。

しかし、このようなキリスト者が忘れているのは、聖さは神だけが持つものであることです。自分がただの人間に過ぎないことを、自覚しなくてはいけません。信者は、神の聖さを、自分の聖さと考えることはできないのです。神の聖さは、怖れをもって見守るべきものであり、人の手には届きません。救われ、生まれ変わっているとはいえ、私たちは今も人間のままです。神の聖さが、人の聖さとなるために必要なのは、主イエス様のいのちを吹き込むことです。まさしく、主は聖さがかたちをとって現われたお方です。

霊においては、主は罪人と完全にかけ離れたお方です。ペテロがイエス様を見たとき、こう泣き叫ぶしかありませんでした、『私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから。』(ルカ 5:8 後半)しかし、一方で主は罪人の友であられます。社会からは拒絶されている取税人や遊女を、キリストは哀れみ、深く同情して、彼らへの慰めとなりました。ある面で、主は、罪人とかけ離れていることでご自身の聖さを示されますが、別の面では、罪人の友として、等しく聖い方であられます。キリストは、人を寄せ付けない方ではなく、また、厳しく接することもありません。信者たちの聖さもそれにならって、優美で暖かなものとなれば、人から愛され、讃えられます。ここから分かるように、人への厳しさは、聖さではありません。

このふたつの心のあり方、心の状態は全く違うものです。聖いのは確かに良いことです。しかし、聖くあるものは、自分を律することを恐れないと明言すべきです。十字架の道を歩くものなら、自己憐憫に耽ることは避けても、人に対しては、愛と哀れみを忘れないのは当たり前のことです。神は聖いだけでなく、また、恵みと哀れみにあふれています。私たちも、聖くはあっても、石のように冷たく、思いやりに欠けることがあってはいけません。神が私たちを救うのは、『人間らしさをなくする』ためではありません。むしろ反対で、私たちが『人間らしくない』からこそ、人間となれるように救うのです。私たちキリスト者は、理不尽で、不合理と思われてもいいですが、それでも、誰からも近づきやすい者でありたいものです。本当に聖いのちからは信仰、やさしさ、平安と寛大が現れていなくてはいけません。羊飼いが、群れを養うように、私たちも忍耐強く人々に接しましょう。注ぎだされたいのちは、実を結びます。厳しさは人を遠ざけてしまいます。寛大さだけが人の心を溶かし、天国に続く道に引き込むのです。

24.神の恵みが明らかにされるとき

私たちに向けられる神の恵みは変わることがありません。主の恵みに対する私たちの受け止め方が、時によって変わるだけです。実際には、神の恵みはとどまることなく注がれています。しかし、私たちは、時に、主の恵みを受け取ることができなくなるようです。神の変わらない恵みを享受するためには、まず、飢え渇いていることが必要です。飢え渇きを強く感じるほど、恵みを強く求めるようになります。恵みがどうしても必要だと感じなければ、神がくださる恵みに、感謝することもないでしょう。神の聖者たちが犯す大きな過ちがあります。自分が罪人だったときだけ、恵みが必要だったと考えてしまうことです。私たちは確かに神の恵みによって救われました。これは紛れもない事実です。それでも、神の恵みは全生涯を通して必要なのです。人生の全ての瞬間は、主の恵みの中で、恵みによって生きるべきものです。私たちは神の恵みを通してこの人生に入り、人生の旅路を神の恵みによって終えるのです。神は、私たちの罪の裁きを、主イエス・キリストの十字架につけられた御体に負わせて、その罪を許されました。これは真実です。主は、私たちが信じて救われることを可能としてくださいましたし、この恵みは計り知れないものです。それなのに、ああ、私たちの心は欺きに満ちています！

私たちキリスト者は、主の恵みを通して多くの勝利を経験しますし、勝利のうちに進んでいるときは、その勝利を自分の栄誉と考え、自分を良いものと思い込んでしまうものです。主が変わらない恵みをくださっても、それに気づかなかったり、恵みの必要を認めないからです。これは私たちの心の不誠実さから来ています。このため、神は時に、敵である悪魔が人を試すままにしておかれます。主は、サタンが私たちをふるいにかけることさえ許されます(ルカ 22:31～32 参照)。こうして打ちのめされたとき、心の中は嘆き悲しみ、自分の罪を憎み、自分は罪が肉のかたちをとったものだとさえ思い込みます。そして、主が自分を地獄へ追い落とすことがあっても、仕方のない

ことだと考えるでしょう。

しかし、そのような時も、神は恵みを与えてくださっています。どれほど大きな罪を犯しても、主の恵みは私たちに十分なものです。主は、その罪を許したいと望んでおられます。ですから、何度、過ちを犯そうと、主は離れることも、見捨てることもしません。そのことに気付いた時、誰もが心から感謝するしょう！私たちは主のあまりに大きな恵みに言葉を失います。このような望みのない罪人にも、主は恵みを与え、哀れみを示し、心にかけてくださいます。ここで、私たちは神の尽きない恵みにさらなる感謝をし、それによって、どんな時も主の恵みが必要であることに気付きます。神が恵みを示し続けてくれなければ、私たちはとうに滅びていたでしょう。このように自分の罪を認めるとき、神の恵みの大切さを知ることになります。

恵みによって、人はへりくだります。罪がなければ、恵みを必要とすることもありません。自分が罪人であると告白することは、へりくだった行いです。御霊が、裁かれた私たちの罪を見せてくださるとき、へりくだることは比較的、容易です。しかし、来る日も来る日も裁かれる自分を見せつけられ、自分の中によいものは何もないと告白するのは、ずっと難しいことです。自分によいことは何もできないと告白し続けることが難しいのは、私たちの心にいつも自分が栄光を受けたいという願いがあるからです。私たちは、自分には良い行いができると思い込んでいるところがあり、そのために、神の恵みを忘れ、恵みは必要ではないとすら考えてしまいます。へりくだっている時でさえ、アダムから受け継いだいのちが堕落し、汚れ切ったものであると告白しようとしません。私たちは、どれだけ神の恵みを必要としているでしょう！

神は、一方で私たちが、苦しみを乗り越えて生きることを願いながら、同時に、毎日、打ち負かされて、主の恵みの必要を感じて欲しいと望んでおられるように見えます。苦しみの日には、神の恵みがとても優しく甘美なものと感じますが、いつも同じその気持ちを持ち続けたいものです。平坦ないつも通りの日も、苦難の時と同じように、神の恵みの必要を感じていなくてはいけません。古いアダムのいのちが外に現れるとき、私たちは自分が汚れていると告白します。しかし、悲しむべきことに、何もない平安な日々、同じアダムのいのちが外に見えなくなると、気持ちが変わって、へりくだることをやめてしまいます。古いいのちと性質の中ではすべてが罪で深く汚れていること、それ故、神の恵みがなければ、私たちはとうの昔に滅びていたことを覚えることができますように。

ハレルヤ！主は恵みに満ちています。

25.罪の感覚

主の恵みを讃えながらも、私たちは罪を憎んでいません。罪は、世俗の人、聖人の心の中、どこに現れても忌まわしいものです。神の恵みを伝える働きは、栄光に満ちています。私たちは、誠実に、熱意を持って、恵みによる神の救いを世界へと広めなくてはなりません。しかし、神の恵みを広めながら、人の罪には触れずにおくなら、神の恵みを誤解しているだけでなく、その恵みを冒とくすることになります。神は、恵みと律法をもって、人を取り扱いますが、どちらであろうと、罪は裁かれ、拒絶されなければなりません。神の恵みを広めながら、罪を心地よく感じるなら、その人は神の恵みのことを何ひとつ知らないことになります。『恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。』（ローマ 6:1 後半）本当に生まれ変わった人なら、必ずこう答えるでしょう、『絶対にそんなことはありません。』（ローマ 6:2 前半）

罪を罪と考えない人々がいることは、神の誠実な聖徒の心を悲しませます。人は新しい言葉をいろいろと思いついては、罪を覆い隠そうとします。もっと悲しいことには、生まれ変わったキリスト者も、多くが罪を軽く考えてしまいます。神に与えられた罪の感覚を少しずつ失ってしまった信者たちがいるのは、なんとも残念なことです。彼らは罪と戦っていないわけではありません。彼らは戦ったのです！本当に生まれ変わったのであれば、キリスト者としての生活の始まった時、罪を憎んだはずだからです。彼らには罪を憎むという新しい性質が与えられました。必死の思いで罪に抵抗したのです。しかし、勝利よりも、敗北することが多かったために、意気消沈してしまったのでしょう。彼らは、罪に打ち負かされることを当たり前のように受け止め、また、自分が罪に勝利することなど不可能だと思い込んでいます。あまりに罪に汚されて、良心が麻痺してしまい、もはや、声高に罪を拒絶することすらないのです。どこまで堕落してしまったことでしょう！なんと悲しいことでしょう！

この人たちも第 1ヨハネ 1:9 の教えを知っているはずです、『もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。』それでも、彼らは神の聖さをもてあそぶように、何をしようと神の恵みで許されると考え始めます。『罪を犯したら、許しを乞えばいいだけさ。罪を犯してもどうということはない。』言葉にこそしなくても、心の中ではこんなふうに決めつけているのです。

こうして多くの信者が失敗してしまいます。罪に対する正しい感覚を亡くしてしまうのです。現実に、霊の内で感じることと、肉の思いがほとんど同じになってゆきます。いつも心が傷つき、大きな苦しみを受けていると、罪に対する感覚は鈍くなります。罪を憎み、拒絶しなければ、私たちの良心は、鋭さを失ってゆきます。犯した罪を告白しなければ、そのたびに、良心はかたくなになります。こうして、罪への憎しみはついえてゆき、罪の感覚が消えてしまうのです。

私たちは、たくさんの小さな敗北を重ねています。つまらない嘘が、不信仰の行いを生み、義のない小さな行いを

生み、それが敗北へとつながってゆきます。私たちは、良心に鑑みて自分を批判することなく、いつも自分を偽って、そんなことはどうでも良いと思い込もうとします。このような態度は、良心のとがめを抑え込んで、心をかたくなにします。私たちの心は、致命的な傷を負うことになります。自分の良心からの告発に耳をふさいで、罪を告白しなければ、罪を取り除くことはできるはずもなく、神の聖さの標準を満たすことさえできなくなります。自分が罪に対して過剰に反応しているのではないかと恐れる必要などありません！良心からの告発を受けて、自分を裁き、罪を消し去りたいと望むたびに、罪に対する感覚は鋭敏になっていきます。勝利を得る聖徒とは、自分を裁く信者のことです。罪人が、罪に対する究極の罰（すなわち地獄）を恐れるように、私たち信者も罪の力を恐れるべきです。いつも、この警戒を怠らず、心がかたくなにならないように気をつけて、罪に対する敏感さを失わないようにしましょう。霊が敏感さをなくせば、霊的ないのちが干上がってしまうからです。

罪を軽んじる人は、神の恵みも軽視しています。しかし、深い泥沼にはまった経験から、罪がどれほど恐ろしいものか気づいた人は、そこで見いだした神の恵みの大切さを知ります。小さな罪を犯しただけで、すぐに許されたと思いこんでいる人は、罪が許される恵みを理解することができません。

26.神のために働きすぎると‥‥

主は、私たちの中で、私たちのために多くの恵みに満ちた働きをされました。とはいえ、その働きより、主ご自身のほうがはるかに大切です。主のために過剰に働きすぎると、人からは熱心に神に仕える人と言ってもらえるかも知れませんが、主との個人的な交わりは奪われてしまいます。交わりを求めないと、働きの価値を損なうだけでなく、主のぶどう畑でさらに大きな働きをする資格を失ってしまいます。

27.神の守り

世界の全ての金と銀は神の所有物です（ハガイ 2:8 を参照）。千の丘の家畜らもまた、主のものです（詩篇 50:10 後半）。ですから、私たちは菜食主義者である必要はありません。神が自分の子供のことを忘れることなど、決してありません。私たちは、弱い親かもしれませんが、それでも、子供を忘れたりしません。私たちの神は最良の父親です。自分の子供を忘れることなどあるでしょうか？

28.神の誠実さ

神は愛の神であられ、正しく真実なお方ですから、私たちも主と同じ誠実さを持つことができますように。主を愛するすべての人が、素晴らしい永遠の生を持っているのなら、――そして、事実、主は行いの正しい人から良いものを取りあげることは決してなさいません――私たちは、自分の行動を補うために、『神の誠実さを手に入れ』ようではありませんか。

多くの信者は、悲嘆にくれ、人を助けることの喜びと力を見失っていますが、これは神の真実さを手に入れていないからです。ポケットにお金があり、台所には食べ物があるときは、誰でもたやすく、自分は神を信じていると思い込むものです。しかし、私たちが信仰を亡くした時でさえ、主の真実さは揺るぐことなく立っています。

29.神のことば

生ける神は、いつまでも生きておられ、主の御ことばもどんな時も消えることはありません。私たちは、御言葉に頼って生きることができます。主の御ことばはすべてが啓示を通して現れたものであって、何であろうと、神が言われたことに、すべてをゆだねてよいのです。一日のはじまり、朝の見張りの時間に食べるもの、神の律法を愛して、夜昼なく律法のことを思い続けるもの、信仰と言葉を混ぜ合わせる者、このような人たちはすべてが必ず、霊的な滋養と強さをいただけるでしょう。

30.価値のある働き

神の真実のことを、知識として知っているだけでは、喜びも利得も必ず受け取れる確証とはなりません。持っているものが知識だけだったら、自分自身が混乱してしまいます。心の中で、霊的な実践をすることが絶対に必要であり、それは、御霊が私たちの中で活発に働くことによって成されます。

31.私たちの祈り

誰かにへりくだってほしいと願うとき、私は必ず、その人の祈りの生活について尋ねます。この質問以上に、悲しみと過ちの告白を引き出す方法を、私は知りません。人前でする祈り、一人だけでする祈り、どちらであっても、祈りはへりくだる経験であり、同時に、今、さまよっている道から引き上げて欲しいというと願いをかき立てることになります。

32.おくびょう

私はある兄弟と、樫の木陰でノートを広げて見せあっているところです。どうすれば、主のために最善のかたちで働けるか、中でも、いちばん効き目のある説教とはどういうものか、お互いの考えを比べています。その友はこういいます、『私はいつも説教を書いたら、もう一度、注意深く見直します。その説教に、聞き手の誰かの気分を損ねるかもしれない箇所があれば、すぐに消してしまいます。』これを言ったのは若い牧師で、彼が最も不安だったのは、自分が説教師であると人に知られることでした。私は、聞き間違えたのかと思い、彼に確かめました、『あなたが言っているのは、罪や、やがてくるさばきの恐ろしさについて語っている厳しい言葉は、自分の言葉も聖書の御ことばも含めて、もっと優しい言葉に置き換えたり、削除することさえあるということですか？』彼は答えました、『そうです。その言葉が誰かの気分を害すると思ったらそうしますね。』私は、これが彼の正直な証しなのだろうと思いました。なぜ多くの説教者がこれほど無力なのか、ここに現れているのではないでしょうか？『人を恐れるとわなにかかる』（箴言 29:25 前半）。これは何と言う真実でしょうか！

33.神に知られている

神に仕える中に、喜びと感じることはありますが、私は満足していません。このような状態で、『わたしについて来なさい』と呼びかけられるお方が、私に向かって直接、『ついて来なさい』と語りかけておられることに気付きます（例えば、マルコ 10:21 を参照）。ああ、主について歩くその途上でさえ、私は何と無知な者でしょう。私は、いつも、近道をしようとして、迷ってしまいます。しかし、聖書知識を追い求めるのはよくないことなのでしょうか？それでも、今日、私はあることに気づくようになりました。それは、人生のどの局面で、何が私に降りかかろうと、私は本当に何も知らないし、知りたいとも思わないことです。『人が神を愛するなら、その人は神に知られているのです』（第 1 コリント 8:3）。

34.私はあきらめない

キリスト者であるのは、確かに苦しいことですが、それでも、私は決してあきらめません。十字架は、自分にとって栄光であって、決して恥としないと心に決めています。ああ、主よ、目をあげれば、あたりにはあなた以外誰も見えません。あなたは私の一番、近くにいる方です、主よ。あなたの他には、何もないし、誰一人いません。両親に聖書を隠されてしまったのですが、他に小さな新約聖書をもっています。ですから、もう飢えることはありません。近しい親戚も私を嫌っていますが、そのために主とともに歩むというこの決心が揺らぐことはありません。何があっても、私の気持ちがくじけないようにお祈りください。サタンは絶え間なく攻撃を続け、主は離れてしまった、もう祈りを聞くことはないと、私に言い続けています。しかし、主は聖書の中で、ヘブル書の一節を示してくださいました、『わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない』（13:5 後半）。

例えば、主はある方を通じて、私に小さな新約聖書を送ってくれました。ここからも、主の目が私に注がれていて、私を忘れていないことが分かります。どうして、主を離れることなどできるでしょう？主に従う私たちは、この世のものではなく、世は私たちを憎んでいます（例えばヨハネ 15 章 18～19 節を参照）。世に憎まれようとも、私は主の愛に満足しています。主の愛は、人の愛を数百万倍も超えているからです。私を狙うサタンは、心に多くの残忍な計略を秘めています。しかし、サタンが何をたくらもうと、私をキリストにある神への愛から引き離すことはできません（ローマ書 8:38-39 を参照）。私はすべてを投げ打って、イエス様に従いたいと願っています。人生の全てを費やすことになろうと、その気持ちは変わりません。

私は主の愛を味わいました。これからも、主の足元に座り、その甘美さを味わい続けることでしょう。以前の私は、主がいなくても平気でしたが、今は主と御言葉なしでは一瞬たりとも生きていけません。勝利の主、栄光にあふれた主、あなたは再び来られます。その時、あなたが定めた道を、私が歩いていますように！

あえて言いますが、一度、勇敢にサタンと戦ったのだから（第 2 テモテ 4:7 前半を参照）、それですべてが終わりだと信じている人が大勢います。決して、そのようなものではありません。確かに、勝利は揺るぎないものですが、その戦いが終わることは約束されていません。

キリスト者は、主と一体になった交わりを経験することが必要です。主とともに死ぬ、すなわち、主の死とより深く結び付くという、さらに深遠な経験を与えられること、それを通して、『もはや私ではなく』なることを主に願う時、主はあらゆる種類の絶望と拒絶を私たちに向けられます。そのような時も、悲しみにくれることなく、むしろ、主を讃えましょう。『もはや私ではなく』なるという、私たちの思いと願いを、主がかなえてくださるからです（ガラテヤ 2:20 を参照）。

35.キリストを地上で現す

『さばいてはいけません。さばかれないためです』（マタイ 7:1）。ひとりひとりの信者がこの言葉の意味を知り、実践できるように、主よ、助けてください。キリスト者は、心の中で人を裁くときも、言葉で裁く場合も、まずは、自分

自身の弱さを認めるべきです。

神の言葉によって真に変えられた人は、説教者になる資格があります。キリストに変えられた者は、人々をキリストにどう導くか、悩む必要はありません。主を愛する一人ひとりが理解しておくべきことがあります。人は、自分自身の中にキリストを見ることができなければ、他のどこにも生けるまことの神を見出すことなどできません。

キリスト者とは、この地上でのキリストの現れです。彼らはキリストのいのちを生きなければいけません。聖霊に満ちているキリスト者は、『わき出る』(ヨハネ 4:14)ように、また、『流れ出る』(7:38)ように生き生きとした態度で仕えます。主に真に信頼していることは、次の三つの行いに現れます。まず、自分を表に出さない、主を褒め称える、そして、心の底から主を愛することです。聖書を隅々まで真摯に読めば、主を拒むことなどできません。恵みと真実は、いつも共にあります。どちらが欠けることはありません。価値のない情熱、すなわち、神の御心のうちにない熱心さは、必ず、傷を負わせ、罪を犯す原因となります。肉の享楽に耽ることは、栄光の家を追い求める上で障害にしかなりません。

生徒が先生より、偉いことはありません。主が苦しんだのに、弟子たちが平安な暮らしを望むことなどできるでしょうか？私たちは、安らぎを求めることはせず、また、自分から苦しみを探すこともしません。気を付けるべきは、敵への恐怖に支配されることではなく、自分の中に何かの『隙』ができることです(エゼキエル 26:10)。自分が主のために犠牲にしたものではなく、主が私たちのために投げ打ったものの大きさを心に留めましょう。それと同時に、主のためにまだ捨てていないものがどれだけあるかも考えてみましょう。

『御霊に従って歩む』(ローマ 8:4)。『御霊によって歩みなさい』(ガラテヤ 5:16 前半)。『御霊に導かれて、進もうではありませんか』(ガラテヤ 5:25 前半)。御霊にある休息はなんと平安なことでしょう！

『隠れて話したことは何もありません』(ヨハネ 18:20 後半)。主のものとなった全てに、あなたのこの足跡に従っていきたいという望みを与えてください！

何をするにも、『主のために』行うようにしましょう。これが私たちの平和と喜びです。きれい好きな人なら、食器をまた使う前に、一枚一枚きれいに拭きとるでしょう。主は、これよりずっと多くのことをしてくれます！

高揚した気分に捕えられているとき、御霊が現れて、その思いを十字架にかけてくれます。同時に、主は、私たちが何かひとつのものだけに心を留めることを許してくださいます。その何かが、イエス様でもよいのです(ヘブル 12:2 前半を参照)。信仰があれば、不可能を可能にすることができます。また、愛のある者なら自分の重荷を軽くすることができます。私たちが日々、愛に満ち、真実への思いを増し加えることができますように。

*引用元に関する注意書き

1923 年 1 月から、中国における主の僕、ウォッチマン・ニーに、雑誌か定期刊行物を発刊せよという重責が、主より与えられました。神の子供たちを助けるための、霊的な生活、霊的な戦争に関する刊行物です。1925 年 5 月から、1927 年まで、ニーは、『ザ・クリスチャン』と言う名前の雑誌を発行しました。全部で 24 巻が出版されています。この雑誌には明確な目的があり、それは、キリスト者の霊的ないのちを耕し、キリスト・イエスの十字架の救いを広め、そして、人々にいわゆる『新神学(New Theology)』の危険を警告することでした。同時にこの雑誌は、預言と予型論にも多少、触れていました。

ここまでに掲載した文章(1～35)は、『ザ・クリスチャン』誌から抜粋されたものであることを明記しておきます。すべての記事はウォッチマン・ニー自身が書いたもので、本書のために、初めて英語に翻訳されて、英語圏の人々にも読んでいただけることになりました。私たちの祝福された主が、ご自身の子供たちを教え導くために、この本が使われますように。

36.生きた供え物の 3 つの特徴

ローマ書の 12 章で、献身とは、私たちのからだを神に仕えるための聖い、生きた供え物としてささげること、とされています。このような供え物には 3 つの特徴があります。ここで語られるひとつ目は『聖い』こと、すなわち、神のために選び分けられていることです。私には、日本との戦争の間、中国政府の役人だった友人がいます。一度、彼を食事に招いたことがあるのですが、答えはこうでした、『すまないがそれはできない。私はこの体を国に売ったのだ。もう自分の好きなようにはできない。』私たちの体が選び分けられたというのも、これと同じ意味です。誰一人、それに触れることも、使うこともできません。神が用いるために取り分けてあるからです。これが、『聖い』、または、神のために選び分けられていると言う意味です。

供え物の二つ目の特徴は、神に『受け入れてもらえる』ことです。そして、三つ目の特徴は、そのような供え物は、なされて『当然』のものであることです。神は私たちに何かを与えて、何かを与えないということはされません。主は私たちにも何も隠さずに差し出すことを望んでおられます。主は、どれだけ与えるかではなく、この主の望みの通りに、私たちが動いているかを見ています。神はいつでも、ためらうことなく、余すところなく、与えてくださいます。私たちも、主に対して同じように与えるべきではな

いでしょうか？私たちの献身において、『量』を見れば、私たちが実際に神に与えるものはあまりにも僅かで、主がくださったものとは、比較にすらなりません。けれども、『質』は同じはずです。

37.献身は主の恵みであり、私たちの喜び

神が、ご自身への献身を求められることは、私たちにとって何という大きな喜びでしょうか！パウロは、コリントの信者たちに、主が死んでよみがえったのだから、もはや彼らも自分のためにではなく、主のために生きなくてはいけないと語りました（第２コリント 5:15 を参照）。もし、私たちのために死んでよみがえられた主が、ご自身のために生きる機会を与えてくださらなければ、キリスト者としての生活はとても惨めなものとなるでしょう。

ある時、私は引っ越しすることになりました。その頃、私は一人暮らしで、自分だけでは重い家具を動かすことは、とてもできなかったのですが、二人の兄弟が来て、手を貸してくれ、家具を全部、運んでくれました。彼らのからだはホコリまみれになってしまいました。私は兄弟たちにお腹が空いていないか、喉が渇いていないか尋ねましたが、『そんなことはない』という答えでした。彼らはそのまま、自分の家に帰りました。その夜、私は二人の兄弟が汗まみれで、汚れたまま家に帰り、自分は何のお礼もしなかったことが気になって、いつまでも眠れませんでした。心の中でそのことを深く悔やんでいました。その日は一晩中、よく眠れなかったのです。

主イエス様は、私たちのあがないという御業を成し遂げられました。主がなされたことは、家具を動かす仕事よりはるかに大きなものです。『主よ、私たちに何をして欲しいのですか？』と訊けば、主はこう答えるでしょう、『私がすべてをなした。あなたは何もしなくてよい。』この会話が本当に行われたとしたら、誰もがとても落ち着かない気持ちになったでしょう。神が私たちをあがなわれたとき、ひとつ目の大きな恵みをくださったと、私はいつも感じます。そして、私たちが自分を捧げることを許されるとき、主は二番目の大きな恵みをくださいます。

もし、主のあがないを受けながら、主のために生きるという気持ちがなければ、その人はまったく、または、ほとんど救われていないと思わざるをえません。そのような人は、神の救いの素晴らしさをよく分かっていないからです。

38.痛みを伴う喜びがいちばんの喜び

ツァレファテのやもめの女が、エリヤに振る舞った食事を覚えているでしょうか？かめの中の一握りの粉と、つぼにほんの少しの油が残っていただけだったのに、預言者エリヤは、小さなパン菓子を作るように求めたのです（第一列王記 17:8～16 を参照）。人間的な見方をすれば、エリヤの言葉はこの上なく残酷なものでした。預言者のためにパン菓子を作っている時、やもめの女の心はどれだけつらかったでしょう。その後、どうやって食べて行けばいいかも分からなかったのです。しかし、このパン菓子が最後とはならなかったことに気を付けてください。それどころか、その後も長い間、食べ続けることができたのです。それだけでなく、よこしまなアハブ王の時代に、国全体に多くのやもめ女がいましたが、後世まで記憶されるのはこの人だけでした（ルカ 4:25～26 を参照）。それは、彼女が持っていたもの全てを神の預言者に捧げたからに他なりません。

全てを主に捧げるとは、情熱的な衝動から一度だけするものではなく、気の向いた時だけ行うというものでもありません。どんな時も、続けて行かなくてはいけません。捧げ続けることは、おそらく、大きな痛みをもたらすでしょう。しかし、大きな喜びも与えてくれます。痛みを伴う喜びこそが最良のものです。そんな喜びのおかげで、涙を流すことも、よくあります。喜びの涙が流れ落ちるとき、賛美が沸き上がります。この喜びは特別のものです。それはこの世の肉的なキリスト者には、経験できないものです。

39.みずみずしい献身を続けよう

旧約聖書には、天幕の外に置かれる祭壇の火は、一度しか点けてはならないと書かれています。毎日、たきぎを次ぎ足し、いけにえを捧げ続けて、その火は昼も夜も、絶えることなく祭壇の上で燃えていなければならなかったのです（レビ記 6:12 を参照）。火を点けてよいのは一度だけです。燃え尽きた後で、新しい火を灯すことは許されませんでした。祭壇の火は、消えることなく燃え続けていることが求められていました。祭壇の火を保つためには、毎日、休むことなくいけにえを捧げることが必要でした。

新約聖書では、私たちは自分のからだを、生きた供え物としてささげることを求められています（再びローマ 12:1 を参照）。燃える火を守り続けるために、絶えることなく自分を神へのいけにえとして捧げなければいけません。生きた供え物とは、生きている限り、自分を神へのいけにえとして捧げ続けるという意味です。罪を犯したり、何かを差し出さずおけば、私たちはみずみずしさを失います。そして、そのままで捧げ続けるなら、祭壇に置かれた神の火を消してしまうことになります。

もしあなたが、自分が傷つくことはしたくないと思ったら、または、愛、思い、願い、欲求、望みや期待を大切にするあまり、自分の欲望、意思や感情が傷つけられることは避けたいと考えたら、その瞬間、あなたは、自身を生ける供え物として捧げることをやめたのです。自分を傷

つけたことが、一度としてないのに、心のうちでは喜びで満たされていられると言うなら、そんな喜びは頼りないものです。自分の全てを祭壇に捧げてはじめて、あなたは供え物となるからです。あなたは傷を負い、苦しみ、大切なものを失いながらも、神には何かを差し出しています。この時、あなたは自分に逆らって生きているかのように見えるでしょう。しかし、うちなる喜びは絶えることなく沸き立つのです。

40.御霊と文字の違い

『文字』とは何でしょう？そして、『御霊』とは何でしょう？そしてまた、心の感覚と、霊の感覚の違いは何でしょう？聖書の中の『文字』は、決して悪いものではありません。第２コリント３章６節でパウロが語る『文字』は旧約聖書を指しています。旧約聖書は聖書の一部ではありますが、その中の霊にふれることがなければ、聖書の御言葉もただの文字でしかありません。そのため、聖書のような素晴らしいものでさえ、文字の羅列となってしまう可能性があるのです。御霊が語り、聖書に残されているその言葉に私たちがふれても、御霊にふれることができなければ、神の言葉はただの文字に変わってしまいます。これが、ここでいう『文字』という言葉の本当の意味です。人がローマ書を 365 日間読み続けて、そこに書かれたすべての摂理を客観的には理解したとしても、御霊の言葉や働きに心を動かされる日は一日たりともないということすらあり得るのです。こうなると、その人にとって、ローマ書は文字以外の何物でもなくなってしまいます。例えば、朝起きて、すぐに聖書を読み、おりにふれて祈っているとしましょう。しかし、これがただの生活習慣となってしまえば、私たちも神の御言葉を写した文字の中に埋もれてしまいます。そこには、外に向けたみせかけの霊性はあっても、内なる霊は動いていません。その結果は文字だけとなります。

41.霊の敏感さについて

パウロは旧約聖書からの言葉を引用していますが、引用のしかたは、当時のパリサイ人とは大いに違っています。パウロには御霊がありましたが、パリサイ人にありませんでした（ヨハネ 5:39-40 を参照）。霊的な事柄においては、『類似』とは、教えの内容が完全にひとつであることを意味していません。そこには、異なった内なる事実が込められているはずです。似ていることは、同一であることとも違います。彼らは完全に違っています。誰かの声色、身振りや教えまでそっくりに真似できるとしましょう。すべてがその人と同じように聞こえるかもしれませんが、しかしそこには、精神が欠けています。それは、文字にすぎません。キリスト信仰の基本となるのは、そこに御霊が臨在するかどうかです。

マタイ伝７章で、主はこう言われています。来るべき日、主の裁きの座で、一群の人々が御前に引き出されます。その人たちは、主の名によって熱心に預言をし、悪霊を追い出し、また、奇蹟をたくさん行なってきたのですが、主が彼らにかける言葉は、『わたしはあなたがたを全然知らない』（22～23 節）。ここから分かるように、どれだけ熱心に主に仕え、主の権威の下に悪霊を追い出したり、大きな奇跡を行ったとしても、問題の核心は、私たちがどれほどのことを成したかではなく、その行いが肉から生まれたか、または、御霊から生まれたかにあるのです。霊的な心に感じるものは、すべて御霊から生まれたものです。主に受け入れてもらえるのはこれだけです。内住の御霊は、私たちの生まれかわった心に、何かが本当に御霊から来ているか、見極める感性を与えてくれます。御霊は、私たちを急がせたり、押さえつけたりし、また、歩かせることも、引き止めることもあります。霊的なものを感じ取る力があれば、御霊の道に沿って生き、仕えるにはどうすればよいか、理解できます。

これは馬の口に噛ませたくつわに例えると分かりやすいでしょう。乗り手は手綱を引いて、自分の思う方向に馬を進めます。乗り手が小さな動きを見せるだけで、馬は曲がるのか、まっすぐ進むのか、もっと早く走るのか、それとも、速度を落とすのか、ただちに理解します。手綱を引かれると、馬は手の動きを感じ取り、乗り手の行きたい方向に進みます。気づかないほど小さな手の動きで、乗り手は馬を思いのままに操ることができます。

同じやり方で、御霊は私たちの心の中を動かします。私たちがあまりに話しすぎると、主は懲らしめを与えます。道に迷いそうなときは、声をかけて教えてくれます。ある兄弟は証しの中で、救われるまでの自分は、晩餐の席でいつも注目の的だったと話しました。しかし、救われた後、彼はどの晩さん会に行っても注目を浴びることはなくなりました。話しすぎた日はいつも、家に帰った後でいやな気持ちになるからです。それまでの彼は、話を聞いてくれる人が多いほど、高揚した気分になったものでした。しかし今や、聞き手の数が多ければ多いほど、落ち込むようになったのです。これは御霊の導きでした。

あなたが、ある人に福音を伝えるように導かれたと感じたとしましょう。これは御霊がそうさせているためです。御霊が、その導きを伝え、あなたの霊のうちにそのような気持ちを引き起こしています。あなたがその導きに、どこまでも従いぬくなら、結果として、あなたは平安と喜びを感じます。私たちが生きて、御霊に仕えているときは、内なる御霊の動きに従っているだけなのです。走っている馬と同じです。馬は何をすべきか、自分で考えているのではなく、乗り手の指示にしたがっているに過ぎません。馬は、人の手の動きの意味をいくつか知っているだけですが、示されるとおり、前に進みます。私たちも、内に住まう御霊が動くのを感じとれたら、聖霊に忠実に従うことができます。

42.御霊に従うためには

御霊が、私たちの精神の中に入らなければ、霊的な感性を持つことはできません。しかし、御霊が中に入っていなくても、私たちの心は、自分の考えを形作ることはできます。ただ、自分なりに心を用いればよいのです。キリスト者は、精神を通じて神と交わります。神は、精神のうちに住まわれるからです。精神によって、人間は神の御霊の動きを感じ取ることができます。これが、神と交わりを持ち、神を知り、神の御心を知ることを可能とするのです。救われるまでは、誰もが自分の心により頼んできました。しかし、救われた後も、自分の心だけを用いて、内なる御霊の動きに従うことをしなければ、キリスト者としての歩みにおいて、大きな間違いを犯すことになるでしょう。

神の御霊に従うにはどうすればよいか、キリスト者となって何年経っても学ぶことがなければ、御霊の導く手が自分に触れても気がつかないでしょう。御霊が、私たちの中に入り込んできてはじめて、御霊が触れていることを感じ取ります。そこで初めて、自分の心で考え、内なる御霊の動きの意味を理解することになります。しかし、御霊が中で動き始めても、個人的なことばかりに心を奪われていれば、すべては失われてしまいます。

私たちは、もともと賢い人ほど神に関わるものごとを早く理解できるし、生まれつき鈍い人は霊的な事柄を学ぶにも時間がかかると思いがちです。しかし、神のみ言葉のどこにも、そのようなことは言われていません。聖書にはこうあります、『それは、こう書いてあるからです。わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしくする。』(第 1 コリント 1:19)神は、賢いものもおろかなものも同じ高さに置かれます。どちらも神の前には役に立たないものです。どちらも、啓示が必要だからです。

神は、人間と相談する必要などありません。『だれが主の相談相手であっただろうか。』(ローマ 11:34 新共同訳)神は、ご自身の御心だけによって働かれるのであり、人がこうあるべきと思うように働くのではありません。神は、こう語られました、『わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ。』(ローマ 9:13)また、神は、こうも言われました、『わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。』(15 節)ここに現れているように、神は、ご自身の思うところのみによって働かれるのであり、人間的な論拠、視点や公平性にたって働かれることはありません。神に従うにあたって、自分の視点、論拠や公正さに基づいて行うなら、神に対して、人間の良識に従うよう求めていることになります。しかし、私たちは神の奴隷であり、塵に過ぎません。私たちにできるのは、神の御座の前にひれ伏すことだけです。神に言葉を返すことなど、どうしてできるでしょう？

すなわち、内なる御霊の動きにつき従う以外に道はないのです。私たちが立つべき土台は服従のみであり、対話ではありません。人が、神の話し相手になることなどできません。人の心は、いつも何かの論拠を探し求め、そこに意味があるか、どうかを考えています。しかし、神は人間に説得してもらうことなど欲していません。ただ、ご自身の御心を行うよう望まれています。主は、私たちと比べることすらできないお方だからです。神と人との間の距離は、あまりにかけ離れていて、測るすべもありません。どんな人間も、神の栄光に近づくことさえできません。神の栄光をほんのわずかでも垣間見たら、私たちは人間的な論拠などすべて投げ出して、主の前にへりくだり、ひれ伏すしかなくなります。ですから、人間の論拠という器官を用いながら、神に従い、御心を知ることはできません。まずは、別の器官を使わなければいけません。それは、人間の霊と言う器官です。

*引用元に関する注意書き

ここまでの 7 つの文章(36～42)は、ニー兄弟が、香港で、1950 年 2 月 2 日から 11 日にかけて、キリストを信じる兄弟たちに語られた説教の中から抜粋したものです。元は中国語でしたが、英語に翻訳されました。ニー兄弟は同じ月の 12 日に上海に戻り、2 年後の 1952 年、共産主義政府に逮捕されました。彼は、刑務所と強制労働所に 20 年間に渡って入れられた後、1972 年、主の下に召されました。

43.神のあわれみ

『したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。』(ローマ 9:16)熱意を持って、神を追い求めることは自分への助けとなります。とは言え、熱心であること、自分自身を探し求めること自体は、意味のないことです。長く待ちすぎることは、まったく待たないのと同じです。走るのに速すぎても、遅すぎても、どちらでもよいことです。あまりに多く聞きすぎても、少なく聞き過ぎても、違いはありません。私たちがすることはすべて、神の哀れみだけに頼っています。御霊だけが、人をまっすぐな道へと導き、その道を歩かせてくれます。少なくとも一生に一度、神のあわれみがどのようなものかを見極めることがどうしても必要です。もちろん、主の哀れみをより多く体験するほど、あなたは成長してゆきます。ある一瞬ですべてを目の当たりにするにせよ、人生全体を通して見続けるにせよ、主の哀れみにふれるときは必ず、そこに霊的な真実を見出すはずです。それはただ心に感じているだけでなく、現実であり、すべてが神のあわれみなのです。

神の哀れみは事実であって、心の中にだけあるものではありません。例として、『生まれ変わる』ことを考えてみましょう。私たちはいつも罪人にこう言います、『あなたははっきりと悔い改めて、少なくとも一度は主を信じなくて

はいけません。』また、信者にはこんなふうに言います、『あなたははっきりと一度、自分を聖別しなくてはいけません。』同じように、神の哀れみを知るためには、あなたも神の哀れみにはっきりと出会うことが必要です。

神にいつも手助けしてもらえる３種類の人があります。強い意志を持った人たち、強い感情を持った人たち、そして、強い心を持つ人たちです。多くの人は、この３つの強さのうち、一つ以上に支配されています。この３つの強さのすべてを、神に砕いていただかなくてはいけません。神は、人の弱いところではなく、強いところに手を下そうと考えておられます。人の強さが、弱さよりも、霊的な成長を妨げることが多いのです。この３つの強さを変えていただかなくては、神のあわれみを認めることはできません。

神の助けを受けた後は、霊的な生活が変えられていくことを体験するでしょう。人生の多くの場面で、何かが多すぎたり、少なすぎたりすること、長く待ち過ぎること、まったく待たないことも、妨げとなります。私たちの霊的な生活の中にこのような面があれば、それは正さなければなりません。信者の中には、内なる人が十分、成長しきっておらず、外なる人のほうが強すぎるものがいます。これは、ごく普通の体型の場合、頭の長さは体全体の７分の一であることに例えることができます。もし頭の大きさが体全体の４分の一、または、16 分の一であったら、どちらの場合もうまく行かないでしょう。心があまりに強すぎる人がおり、また、感情が激しすぎる人もいます。どちらの場合も、内なる人が十分、大きくありません。どちらの場合も、状況を補正してゆくことが求められます。

私たちに本物のへりくだりをさせてくれるのは、神の哀れみしかありません。小さな苦悩を難なく乗り切ったために人の心は高ぶることがあります。一方では、大きな苦悩を必死で乗り越えることが、人にへり下りをもたらしてくれるのです。

44.困難は私たちのパン

民数記 14 章に、カレブがイスラエルの全会衆に向かって言ったことばが記録されています、『ただ、主にそむいてはならない。その地の人々を恐れてはならない。彼ら（背の高いアナク人たち）は私たちのえじきとなるからだ（9 節前半）。』彼は、イスラエルの子供たちに、なぜすぐに出発しなければいけないか、なぜ彼らは必ず勝てるのか、そして、その地に住む人々（アナクの子孫であるネフィリム人）は彼らのえじきであり、恐れる必要がないのはなぜなのか、その理由を語りました。えじきとは、食べることで、力が増し加えるものです。アナク人たちがどれだけ立派な体格をしていても、イスラエルの民なら、彼らをたやすく打ち破ることは、カレブの目に確かでした。カレブが神の約束を信じきっていて、困難をものともしなかったからです。

本当に信じる者は、いつでも、主の約束を強く心に抱いているから、苦難にあってもくよくよと悩むことはしません。しかし、だからと言って、高ぶることがあってはいけません。私たちはまず、主の前にへりくだり、それから、主の勝利に立たなくてはなりません。

ですから、困難な状況に立たされたら、そのたびに、こう尋ねることです、『今度は、私は飢えるのですか？それとも食べるのですか？』と。もし、あなたがキリストの力を通して勝利し、そこから主の力が現れるなら、あなたは再び育まれます。あなたの力は強められ、満たされ続けるでしょう。食べなければ誰も成長できないことを、いつも心にとめておきましょう。

とは言え、私たちの食べ物はいつも、神の御言葉の中にだけあるわけではなく、神の御心を行う中でのみ見いだすものでもありません。アナク人も、やはり私たちの食べ物なのです。アナク人は人生で出会う困難の象徴です。多くの人が神の御言葉を食べ、神の御心を行うことを自分の食べ物としてきました。しかし、ネフィリム人をえじきとすることで自分を育ててきたものは多くありません。多くの人は、アナクの子孫たちを、ほんの少ししか食べていないのです。それは多く食べるほど、強くなるものです。この点において、カレブはとても良い模範となります。アナク人をえじきとした彼は、85 歳になっても力に満ちていたからです。40 歳の時の強さを、85 歳になるまで持ち続けました。えじきとなったアナクの多くの子孫たちが、カレブの中に年を取らない人を形作ったのです。

このようなことが、霊的な面では現実に起こります。主にある兄弟姉妹の多くは、人生において大きな苦難がありません。しかし、人は苦難の中にこそ、自分の弱さを見出すものです。このような人たちは、えじきとしたアナク人があまりに少ないため、神の前に何の力もありません。一方では、苦難にぶつかっても、ものともせずに跳ね返し、また、誘惑にも打ち勝つ人も、いたるところで見ることができます。彼らが強いのは、多くのアナク人をえじきにするからです。ですから、私たちも多くの苦難と誘惑を食べることが必要です。私たちの進む道にサタンが置く苦難と誘惑が、パンとなり得るのです。神はこのようにして、私たちが成長する道を整えられます。信仰のないものは、困難にぶつかると希望を失ってしまいます。しかし、信仰を持つ者に主は、『これが私のパンです』と教えてくれます。神を讃え、感謝しましょう。私たちの行く手に置かれる困難や試練の中に、食べられないようなものはありません。食べても成長の助けとならない苦難などありません。苦難が多いほど、大きく成長できるのです。

45.良心の示す道に従いなさい

自分を欺くことはやめて、御霊に従うことを学び、また、

自分の良心の命ずる声を聞きましょう。内なる声から逃げようせず、注意深く耳を傾けてください。御霊に従えば、私たちはどんな時もへりくだって、良心の正す声に耳を傾けることができます。信じる者が、自分の多くの罪をひとつひとつ見つけだして、数え上げることなどできるはずがないと考えて、あいまいで通り一遍の告白をするのは間違ったことです。このような漠然とした告白は、良心の正しい働きを殺してしまいます。このようなことをせず、御霊が良心にふれるにまかせ、自分の罪をひとつづつ、はっきりと現していただくべきです。信者が行うべきはへりくだって、静かに、そして、従順に、良心がひとつひとつの罪を現すのに任せることであり、そうすることで、良心の裁きを受け入れ、神に抗うすべてのものを吐き出したいと願うようになります。

あなたは、良心に、自分の生き方をすべて探っていただこうという考えがありますか？自分の良心に、本当の心の状態を明らかにしてもらう勇気がありますか？自分の良心に願って、あなたの生活とのすべてを、神の御心の前に広げてもらおう思う気持ちを持っていますか？自分の良心を切り開いて、すべての罪をさらけ出してみたいと思っていますか？その考えがなく、そうするつもりもなく、恐れて身を引いてしまうなら、それはあなたのいのちの中に憎むべき多くの罪があることを現しています。その罪は十字架の元へ引き出されなければなりません。それはまた、あなたが神に従順ではなかったこと、御霊にも完全に従ってこなかったことも意味しています。そこには、神との交わりを妨げる何かがあることがはっきり現れています。主に向かって、『あなたと私の間には何の関わりもありません』などと言うことはできません。

良心とは、私たちの精神の窓です。そこは天の光が差し込むところであり、信者の精神とその存在のすべてが光で満たされます。ここに私たちは天の光を見ます。その光は良心を貫いて、私たちの思い、言葉、行いを照らし、私たちの過ちを現して、罪をさらけ出します。良心が働くことを許し、主の命じるままに、自分の罪を取り除けば、その時、天の光はいっそう明るく輝きます。罪を告白せず、取り除くこともなければ、罪の傷跡が残り、良心は汚されます（テトス 1:15 を参照)。その結果、窓は日ごとに暗くなってゆき、光は中まで入り込むことがなくなります。こうなると信者は、不注意に罪を犯し、それが悪いと気づくこともありません。覆い隠されると良心は鈍くなり、鋭敏さを失います。一方で、信者が自分の精神を研ぎ澄ませば、それだけ、良心も鋭くなってゆきます。

信者にとって、これ以上、告白する必要もなくなるほど、霊的になれることなどありません。どれだけ深遠な知識、精一杯の働き、熱意や鉄の意志をもってしても、良心の鋭敏さの代わりになることはできません。信者が良心をながしろにして、代わりに自分で心と感情を成長させようと考えれば、その人は疑いなく、霊的な旅路において後退して行くことになります。

46.貧しさについて

神の子供たちにはひとつの問題があります。ラオデキアの考え方と目的（黙示録 3:14 以降を参照）を持っていることです。つまり、彼らは現実には貧しいのに、自分は富んでいると思っているのです。霊的なことがらにおいて、何かを持っているか、いないかという問題を解決することは容易ですが、富んでいるか、貧しいかという問題を解決するのはとても難しいことです。持たざる者はたやすく神に出会えるでしょうが、自分を富んでいると考える者が主を見出すことはありません。そのような人が、神の手助けを得るのはもっとも難しいことです。一方で、貧しいものの最大の問題は、自分の貧しさに気づくことの難しさにあります。本当に何ひとつ持たない者にとって、貧しさはあまりに明白な事実であって、容易に認めることができます。ところが、貧しさとは比較の問題であり、富んでいるのか、貧しいのか、自分の状態を定めるのは難しいことです。子供が初めてなにがしかのお金を手にした時、自分が世界一の金持ちであるかのように思いこみ、本当は貧しいことに気付きません。しかし、全く何ひとつ持っていないと想像してみると、いやでも自分の本当の貧しさに気づくでしょう。この世のものを何か少しでも持っていたら、それがいかにつまらないものか、認めることは難しくなります。

霊的な生活において、神は、何も持たない者をどうすればよいか、よくご存知ですが、貧しくてもわずかな物を持っていると、そのわずかな物が自信を持たせてしまうので、大きな問題となります。高ぶりのない貧しさは決して打ち破ることのできない壁ではありませんが、貧しいのに自分を誇る者には、ほとんど希望がありません。したがって、問題は貧しさではなく、その人がラオデキアの教会のようであるか否かというところにあります。悲しむべきことに、多くの神の子供は、ひとつの輪の上をひたすら回るだけで、先へ進むことがありません。その理由はただひとつ、現実には貧しいのに、自分は富んでいると言い切ってしまうことが、その人を殺すのです。

多くの信者が肉について語りながら、肉とはなんであるか、分かっていません。啓示についても話しますが、それが本当に意味するところを知りません。彼らはまた、従順、御国、十字架、自分との葛藤や生まれながらのいのちと言ったことについても、いろいろと語りたがりますが、ご立派な演説をぶっても、自分の貧しさを露呈するだけです。神に触れたことがないのですから、彼らは自分で体験していないものについて、語っていることになります。彼らにできるのは、自分を欺き、自分と同じような人をごまかすことだけです。霊的なことがらにおいては、自分が霊的に富んでいると信じ込んでいる限り、人に富んでいると思ってもらうことはできず、むしろ、霊的な貧しさが誰の目にも明らかになってしまうからです。

貧しいとはどういうことでしょう？霊的な貧しさとは、量の問題ではなく、質の問題です。第 1 コリント 3 章は、金、

銀、宝石が木、草、わらとは違い、反対の性質を持つものであることを示しています。第２テモテ２章は、金と銀の器を、木や土の器と比較して、その違いを語っています。このふたつが、讃えられるべきものは何か、また、恥ずべきものは何かを教えてくれます。あなたの手の中にあるものが、このふたつのどちらなのかを、教えていただく必要があります。私たちの生きている世界では、大量の木、草、わらを持っていても、貧しいことに変わりはありません。一方、霊的な世界においては、器を持っているだけでは十分ではありません。手の中にあるのが金や銀の器か、それとも、木や土の器なのか、自分に訊いてみなくてはなりません。私たち信者は、自分が霊的な何かを持っているかのように思い込んで、いとも簡単に高ぶってしまいますが、実際には手の中にあるものが何なのかもよく分かっていません。これこそ、霊的に貧しいということです。

47.休むことは力

『立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。』（イザヤ 30:15 後半）

霊的な生活において、人がよく陥る過ちがあります。外から見て忙しく立ち働いているときほど、内面では混乱してしまうのです。忙しさで手一杯にはなっていなくても、やはり、私たちの内なるいのちは乱されています。このような状態ですと、外の状況に対応する能力が失われてしまいます。休むことは、キリスト者の生活における力であると覚える必要があります。神ご自身がこう言われたからです、『立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。』興奮しやすい人は、神の前に強くありません。心の乱れている人々は主の前で力を持っていません。私たちの強さは、内なる静けさと休息から来ることを、理解しなければいけません。

渦巻く風の奥には中心があります。風は外側では高速で渦巻いていますが、中心はもっとも静かです。同じように、内面が静かな生活が、私たちに力を与えてくれます。外の世界では風が吹き荒れていても、内側は完璧な静けさを保っています。『落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。』心が外の騒がしさにかき乱されて、静寂を失うことはあってはいけません。そうなれば、周りの世界に押し流されてしまいます。

海を考えてみてください。表面では、波が高く上がり、風が強く吹きつけもしますが、深い底では、何一つ動くものはありません。静寂に満ちています。海底に棲む生物を調べた人々は、その研究結果から、大洋の底ではほとんど動きがないことを証明したそうです。同じように、キリスト者としての生活においても、静寂と休息が必要です。ゆっくり休むことはできなくても、忙しく働く中に、内なる静けさを保つような者であるべきです。内なる休息があれば、敗北することはありません。どのような状況にあっても、私たちは主の前に、何一つ起こっていないかのように生きることです。主が私たちの中におられて、静穏な人生を求めることを助けてくださっています。

休むことの秘訣とは何でしょう？ひとつはピリピ書４章６～7 節に見られます、『何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。』

キリスト者が休息を得るための一番の秘訣は、生きていく上で出会うすべてのこと、要求、仕事、必要、困難などを主に打ち明け、真摯にこう告白することです、『主よ、私はこれらすべてをあなたの御手にゆだねます。』こういった問題に直面したら、祈りと願いによって、感謝とともに、それを主にゆだねてください。何が起ころうと、それを神にゆだねてください。ゆだねたその時、神の平安があなたの心を守り始めます。ゆだねさえすれば、主の平安はすぐにでもやってきます。こうなれば、あなたも私も、日の出から日の入りまで、外の世界に押し流されることはなくなります。困難がどれほど大きくても、どのような問題があろうと、神の平安は私たちに留まり、良心を安らかに保ってくれます。

二つ目の秘訣はマタイ 11:29 に与えられています、『わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。』一つ目の秘訣は信仰であり、二つ目は従順です。神があなたの上に次々と困難な状況を起こすとき、主から与えられた試練に抗ったり、主の御心に逆らい、また、御心とは違うことを求めれば、内なる平和はありません。休息とは献身からやってくることを、覚えてください。困難が起こったとき、ただ、あなたが主から学び、主のくびきを負いさえすれば、自分の思いを遂げることができずにいらだっていても、やはり、心には平安が生まれます。もし、主に向かって、『主よ、あなたが何をして欲しいのであれ、私は喜んでそれをします、』と言えば、間違いなく魂に安らぎを見出すでしょう。人間的な不満や期待は必ず、休息を奪ってしまいます。

48.神に用いられるためには

救われた日から、神はご自身のいのちを私たちの中に入れ、生活の中の様々な問題を通して少しずつ訓練してくださいます。主が私たちに学んで欲しいのは、ご自身と協調して、共に働くことです。神は、ご自身の性質を私たちの中に混ぜ合わせて、御手の内に用いることを願っておられます。神の性質がどれだけ形作られているかということが、神にとってのあなたの価値を計る物差しとなり

ます。内なる神の性質が大きくなるほど、あなたは神に用いられるものとなります。神の性質は、祈るときや、聖書を読んでいるときだけでなく、普段の行動の中でも、増し加わってゆきます。神のいのちが混じることを通してのみ、私たちは霊的に有用な者になってゆくからです。神の人格が中に溶け込むことだけが、私たちを、主の助けとなるものに変えていきます。入り込んだものは小さくても、それが私たちの霊的な価値となります。神がご自身を混ぜ入れるとき、そのいのちが神にとっての私たちの価値として現れます。

すなわち、神がその時々に行うことは、すべてが私たちの中にご自身の性質を日々、増し加えるためなのです。人としての性質があまりに強固であると、神は私たちを通して光り輝くことはできません。しばらくの時間が過ぎると、少しずつ、主は私たちから、外に現れてきます。この過程は、神のいのちが私たちから完全に現される日まで続きます。こうして、キリスト者としての全生涯を通して、神はご自身を私たちと混じり合わせ、これによって、私たちは神への助けとなることができます。

霊的に学んでいる時、心を何に集中するべきでしょうか？福音書にあるように、ペテロはおよそ 3 年間、主とともに歩きました。彼は何を学んだでしょう？主がペテロに教えたのは、神の御性質がどのように人の心の奥底まで入り込めるかと言うことでした。このキリストの弟子は、自分の考えを捨てて、主の考えに入ることを学びました。文字では書かれていなくても、福音の中にその様子がはっきり見て取れます。

自分の考えから抜け出すことを学ばなければ、神に用いられる者にはなれません。すべての奉仕は神から始まり、一度、私たちの中に入ってから、外に現れるべきものであると、心にとめておきましょう。神が中に入り、そして、外に現れてゆくことができなければ、人は私たちの心に触れるだけで、神の心には触れません。自分の心の中にだけ生きることは、人々の心が神にふれる道を閉ざしてしまいます。私たちを通して、人に神にふれてもらうにためは、自分自身から抜け出すことを学ばなくてはいけません。

49.真実と光

天の真理を見るためには、神に光を当てていただくことが絶対に必要です。『どうか、あなたの光とまことを送り、私を導いてください』（詩篇 43:3 前半）。神が照らし出すものとは何でしょう？神の光は、ご自身の真実を照らします。これを理解することはとても大切です。神の光を通してはじめて、その真理を知ることができるからです。真実は説教を聞いて学ぶものではなく、神の光を通して伝えられるものです。今日、兄弟姉妹に、『キリストの助けを受けたことがありますか？』と訊けば、おそらく、多くが、『私は死にましたが、なぜか真実は私のうちに働いていません、』と答えるのではないでしょうか。これは私たちが真理について聞いても、それを見ていないからです。真実を本当に見た者は、光を当てられた者であるはずです。

ある兄弟が証ししました。神がローマ書 6 章を読むようにと彼の目を開き、その後で彼はエペソ書 6 章も見たそうです。彼は、自分の死は事実であると同時にキリストの勝利でもあること、そして、自分が確かにその勝利にあずかっているという事実を見たそうです。それまでの彼は、何かを求めていましたが、今はそれを手に入れました。以前の彼は、主の勝利を願っていましたが、今はこう賛美しています、『主はすでに支配された。』それまでの人生とは、なんと言う違いでしょう。かつてはただ、あこがれ、願っていたものが、今は現実となりました。もう、それを掴もうと手を伸ばすことはしません。既に手の中にあるからです。光が来るとき、私たちは立ち上がって、それが完了したと告げます。

キリスト者は誰もがこのような啓発を経験しています。少なくとも、救われたときに一度は経験したはずです。救われたとき、そこで見たのは、救いへの期待や救いへの願望ではなく、また、いずれは救われるという希望でもなく、すべてがキリストにあって、既に成し遂げられたという事実でした。この啓発のもとではじめて、人はキリスト者となりました。すべてのキリスト者は、この光を現実の中に見たのです。実際には、あらゆる霊的な経験は、こうして真実を知らされるところから始まります。真理が広がっていくとき、そこに光が当てられなければ、単なる教義となってしまいます。しかし、神の光を受けるとき、真実は啓示へと変わり、啓示によって、私たちは真実を得るのです。啓示がなければ、人間的な論理で心を満たすことしかできません。啓示を得たものだけが、現実といのちを持っています。

神の光によって啓発されたとき、聖霊が霊的な現実へと導いてくれます。第一に、慰め主が真理の御霊と呼ばれていることから、真理の御霊が存在することは確かです（ヨハネ 14:16 を参照）。また、一方では真実の言葉である聖書があります。一つには事実としての真理があり、それは神がキリストにおいて成されたことです。聖書は私たちが信じるこの真理を示してくれます。それから聖霊は、私たちを真理の中へ、霊的な現実の中へと導いてくれます。主イエス様がその現実です。御霊によって、神は私たちをこの現実へと引き寄せます。そこで待っているのは、単なる教義や教えではありません。こうして、私たちは自分だけの感情や経験の中にではなく、キリストの成し遂げられた事実の中に生きることになります。

50.きよく、正しく、神に仕える

『われらの生涯のすべての日に、きよく、正しく、恐れなく、

主（神）の御前に仕えよ』（ルカ 1:75）。救われて、聖別されたものは、神に仕える者となります。神に仕えることについてルカの福音書はうたっています、『きよく、正しく、恐れなく、主に仕えよ。』きよさは私たちの側にあるもので、正しさとは他の人たちとの関わりを指すものです。きよさは神が与えてくれる、いわば贈り物です。正しさは学んで得るもの、すなわち、経験なのです。きよさとは性格上の特質であるのに対し、正しさとは学んで得る習慣です。きよさはいのちであり、正しさは生き方です。

主イエス様はご自身のことを、『わたしが道であり、・・・・いのちなのです』と言われました（ヨハネ 14:6 前半）。私たちのいのちはきよく、私たちの道は正しいのです。いのちは私たちの中にありますが、道は人に向かって出てゆきます。内に神のきよいいのちを受けた後は、外に向けて正しく生きる必要があります。外に向けた正しい生活は、内なるきよいいのちの力がなければ成り立ちません。キリスト者は、外から見ればもっとも正しい人と映るかもしれませんが、内なるきよさに支えられたものでなければその正しさには意味がありません。きよさと正しさは、言わば、一枚の硬貨の表と裏のようなもので、両方がなければ成り立ちません。私たちはきよさと正しさの両方において、主に仕えなければなりません。

正しさの問題について考えてみましょう。正しさとは、人やものごとにどう対処するかを示すものです。人は、救われるまで、間違った人生を生きてきました。自分を良いものと思い込んでいたために、そのことに気づいていませんでした。しかし、救われた時、人は神のきよいいのちを受けるのです。こうして、間違った生き方を見直し、正しい人生を始めることになります。これによって、正しさがその人の中に宿り、愛に満ちた行動がおのずと生まれるようになります。正しく、義なる者として、人との毎日を生きていくうえで、間違ったことをしたり、不正なものを受け取って手中に収めると言ったことは、はっきりと拒絶しなくてはいけません。この拒絶は、内なるきよいいのちと神の性質から生まれるものであり、神からの贈り物としていただいたものです。このような二つのつながりを、理解できているでしょうか？

古い話しです。救われた後の 3 年間、私は正しい人であろうと努めましたが、義とはなんであるか、はっきり掴んでいませんでした。ある日、私は、キリスト者の大きな集いで、演台の下、前の席に座っていた宣教者の話しを、新聞で読みました。立ち上がって演台に登るとき、他の席の上の歩かなくてはいけませんでした。彼はうっかり、人の外套を踏んで、汚してしまいましたが、謝ろうとはしませんでした。これを読んですぐに私は、正しくないとはどういうことなのかを悟りました。この説教者には、人のレインコートを汚す権利などなく、それは正しくない行動です。光を受けた時から、私は正しくない行いにどう対処するか悟ったのです。

人生には、多くの正しくないものごと、問題があります。正しくないことは、お金、態度、時間、所有物、などいろいろな場面で、自ずから現れてきます。正しさを追求することは、とても良い霊的な訓練となります。この意味で、御霊からいただける啓発は日光、私たちは窓ガラスに例えることができます。ガラスが何度も煤けたら、いずれは不透明になってしまいます。すなわち、問題は日が当たっているかではなく、ガラスがその光を通すかということにあるのです。まったく同じように、大切なのは、聖霊が光を当ててくれるかではなく、私たちの内側が曇りない状態に保たれているかということです。私たちが義を求めるのは、ガラスをいつもきれいに磨いて、透き通らせておくようなもので、それによって、いつでも聖霊の啓発のもと、霊的な感性を保ち、正しく生きることを可能としてくれます。

51.キリストの体の部分となるために

私たちは十字架がすべての中心であると信じています。しかし、十字架そのものが目標ではありません。十字架は神のきよい目的を理解するための道であり、その目的とはキリストの体です。十字架が生活の中で働くことができれば、自分がキリストの体の一部となったことが分かるでしょう。

多くの信者は、聖さこそが自分の勝利であるかのように追い求めますし、確かにそれは価値あるものです。しかし、神が霊的な経験を与えるのは、私たちがキリストの体の部分となるためであり、霊的な巨人として世界に出てゆくためではないことを心にとめましょう。

私をキリストの体の部分としてくれるものは何でしょう？神が私にキリストの体を見させてくれたら、その啓示は私の生活をどのように変えるでしょう？新しいところに光を当てて、何かを説明してくれるだけでしょうか？いや、この啓示は人生を根底から覆すものでなくてはなりません。それはまさに、私がいかにしてキリストの体の部分とされたかという啓示です！これまでに経験したことや、これから行うことではなく、内なるキリストこそが私を御体の一部としてくださるのです。

私をキリストの体の部分としてくれるものは、自分が持つ能力や行いから出るのではなく、私の中の主のいのちを通して現れます。キリストの体とはキリストだからです。

使徒パウロは、コリント人への第 1 の手紙の中で説明しました、『ちょうど、からだが一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です(12:12)。』この一続きの言葉の中で、パウロは文法的にも、霊的にも、何ひとつ間違いをおかしていません。文法に関しては、パウロは最後の一文をこう書くべきだったと言う人もいるかもしれません、『キリストと教会もそれと同様です。』しかし、この使徒が言おうとしたことは、かしらはキリストであり、体もまた、キリストであることです。キ

リストから来るものはすべてが御体を形作るのに対して、キリストから来ていない物は何ひとつこの体に加わることはできず、切り捨てるしかないからです。

従って、これは何を加えるかでなく、何を差し引くかという問題です。すなわち、キリストの信者が、キリストの体に入り、その一部となるために、何を得たり、何かをする必要はありません。信者に必要なのはただ、自分の持てるものをすべて取り除くことです。そして、まさにこの時点で十字架が目の前に現れます。私から、キリストの体の部分となり得ないものを全て取り除くために、神が用いるのはただひとつ、十字架だからです。私自身の中から生まれる性質や気性といったものは、切り捨てる必要があります。中には、とても利口な信者もおり、自分の明晰さを通して、神の言葉を理解し、人に伝えることさえできると信じています。しかし、このような考えは捨て去らなければなりません。何としても、自分の心から抜け出すことが必要です。頭には救いの兜をかぶらなくてはなりません（エペソ 6:17 前半）。

キリストの体を知り、体験するためには、大きな犠牲が伴うことを理解しなくてはなりません。これはいのちの根源に関わるものです。なぜなら、キリストの体の中では、一部分だけの独立した行動は一切、行うことができないからです。この体の中では、気ままな行動は許されません。人間の体の中も、キリストの霊的な体でも同じことです。手が動けば、腕の筋肉も動かないわけにはいきません。腕が動くとき、指も必ず従います。これが意味するのは、キリストの体においては個人的な言動は全て、消し去るしかないということです。私たちは誰もが、キリストの御体の部分として、協調して動き、お互いに支えあわなければなりません。誰一人、自分だけで存在することはできず、ひとりひとりが兄弟たちと手を取り合って、前に進まなければいけません。

さて、本当にキリストの体を見たなら、他のかしらを持つことはきっぱりと拒絶しなくてはなりません。かしらであるキリストと共にあることはできないからです。ダビデには二人の敵がいました。ゴリアテとサウルです。一人は外にいる敵であり、もう一人は内側にいました。そのどちらも、かしらとしての性格を持っていたことに注意してください（第 1 サムエル 17 章 4 節、10～23 節を参照）。頭から生まれる思いや考えと言ったものは、油注がれた者（この場合はダビデ）がイスラエルのかしら、王となって、玉座につく妨げとなります。ある日、ダビデの放った石が額に一撃を与え、ゴリアテを倒しました。まったく同じ日に、（油は注がれても神に拒絶されることになった）サウルの命運も定まりました。私たちは、この世界のあり方を撃ち破る必要はありません。私たちの格闘は、『血肉に対するものではないからです（エペソ 6:12 前半）。』ゴリアテが倒された時、かしらであったサウルの問題も解決したのです。

本当に十字架を知っていれば、それはあなたをキリストの体の経験へと導くはずです。多くのキリスト者が、主と、十字架の深い意味を分かっているつもりでいます。また、彼らは自分がキリストの体の真実を理解しており、すべてのキリストを信じる兄弟たちと、キリストにおいて一つになっていると主張します。誰もが、古い人を捨て去らなければならないと断言します。それなのに、古い人の性質から実際に離れることができないでいるとは悲劇的なことです。心にとめておいてください。過去も、現在においても、神があなたの人生で起こされたことはみな、キリストの体を経験するための用意だったのです。主が私たちの内になされることはその全てが、道を整えて、キリストの体の部分として役に立つものとするための備えです。

52.『からだを打ちたたく』ことと、からだを痛めつけること

自分の体を痛めつけるとは、肉体の自然な欲求を否定することを言います。これを行う人は、霊的であるとはみなされません。冬になっても温かいお湯を使わず、冷たい水で顔を洗う兄弟がいました。彼はまた、体を痛めつけるために、冬の間も薄着で通しました。ある姉妹が、私を食事に招いてくれました。彼女が作ってくれた料理は奇妙な味がしました。理由を訊いてみると、その答えはこうでした、『霊的になるためには、自分の体を痛めつける必要があります。よい食事をすれば、肉に楽しみを与えることになります。そんな人は霊的にはなれません。だから、肉が喜びを得ないように、私はおいしい料理を作らないことにしているのです。』確かに、キリスト者は、この世の楽しみや、贅沢な食事を求めるべきではありません。しかし、だからと言って、わざと不味い料理を作ることも間違っています。

では、『自分のからだを打ちたたく』（第 1 コリント 9:27 前半）とはどういうことでしょう？これは、肉体から来る欲求が、霊的な生活の妨げとなることを許さないという意味です。この生き方を貫くキリスト者こそ、真に霊的と言えます。『からだを打ちたたく』は、肉体からの自然な欲求はあっても、主とその働きのために必要とあらば、その欲求を投げ出すことをもいとわないということです。自然な欲求をすべて満たすことに執着し続けるなら、そのキリスト者は、体を打ちたたくという霊的な教えを学んでこなかったことになります。

以前、私は一人の兄弟と旅をし、ある家に滞在しました。食卓についている間、彼は箸を休めることなく、皿に盛られた好物を口に運び続けていました。はじめの旅の後、10 年以上経って、再び彼と旅することになりました。その時も、この兄弟は同じことをしていました。この人は、自分の体を打ちたたいて従わせるとはどういうことか、明らかに学んでこなかったのです。自分の体を痛めつけるというのは、体からの自然な欲求をも拒絶すること、肉体のあり方をねじ曲げることを言います。このような行動は誤りです。一方で、からだを打ちたたくことを学ばなかっ

た人は、主の御手の内であまり役に立ちません。

あるとき、私は二人の兄弟と主の奉仕のために出かけました。彼らは、とても活発に福音を述べ伝え、また、熱心に人を助けていましたが、一日のある時間が来ると決まって、働くことをやめて、休み始めるのです。昼食の後は、午睡の時間と決めていたからです。その合間も、多くの人が交わりを持ち、助けを求めるために来たのですが、彼らは誰にも会おうとしませんでした。その時間、私も彼らに手助けを求め、無理に頼みさえしたのですが、無駄でした。これでは、自分の肉に合わせ、自己憐憫や自己愛にふけっているだけです。彼らは自分の体を打ちたたくことを学んでいなかったのです。

中国の道教、仏教は体を痛めつけると言う概念を採り入れていますが、この考え方は聖書的ではありません。『からだを打ちたたく』と言ったとき、パウロは体を自分に仕えさせることについて語っていたのです。彼は、体を自分に仕えさせることができ、自分の肉体に支配されることはありません。これは、人の霊的ないのちが、体の欲求の前に決して、くじけないことを意味します。冬に顔を洗うときは、必ず温かいお湯を使うと決めている人は、体を打ちたたいて従わせることを、身をもって学んでいません。私たちは、体の働きを壊さないように、肉体的な必要には注意を払うべきです。しかし、同時に、この体は霊に支配されていなければなりません。

悲しいことに、兄弟たちの中にも、満腹するまで食べずにいられない人がいます。空腹に耐えられないのです。眠りが足りないと生きていけないからと言って、好きなだけ寝ている人もいます。また、清潔さにこだわるあまり、部屋にホコリがあったり、散らかっていることに耐えられない兄弟がいます。そして、また、堅い木の上では眠れないと言って、やわらかい寝台しか使わない人もあります。これらはみな、その兄弟たちが体を打ちたたくことを学んでいないことを示すものです。キリスト者も、心は燃えていても、肉体が弱いうちは、体を打ちたたくことを学んでいません。このような『自分を愛する』人たちは、神の手の中で、ほとんど役に立ちません。体を打ちたたいて従わせるにはどうすればよいのか、神の深いあわれみを受けて、学ぶことができますように。

引用元に関する注意書き

上の 10 の文章（43～52）は、ウオッチマン・ニーが中国語で伝え、記録されて、第 25 巻と 32 巻に刊行されたものの中から、抜粋して、英語に翻訳しました。英語訳はそれぞれ、『The Broken Loaves and Fishes』と『Serving God in Holiness and Righteousness』と言う題がつけられています。このふたつは、長大なウオッチマン・ニー全集（英語版の題は The Complete Collection of Watchman Nee’s Writings）の中の 2 巻であり、この全集は中国語で刊行されました（出版元 Hong Kong: Manna Publishers、1994 年）。